

文學博士 三宅雄次郎君序
大僧正 本多日生師著 (再版四月廿八日發行)

洋裝全二冊貳千頁
正價金 四圓
特價金 參圓
內地郵税金貳拾錢
臺灣韓八百匁迄の小包料

法華經講義

次 目

- ◎序説 ●第一章緒言 ●第二章法華超勝の教義 ●第三章諸種の法華經觀 ●第四章天台の法華經觀
- ◎第一節 ●第三節待絶二妙の網格 ●第二節法華超勝の教義 ●第三章諸種の法華經觀 ●第四章天台の法華經觀
- ◎第二節 ●第五節但令用實の活顯 ●第六節應身常住の妙義 ●第五節日蓮の法華經觀 ●第一節本化別頭
- ◎第三節 ●第六節十節當教相の眞義 ●第七節身讀法華の壯觀 ●第八節信念成佛の要道 ●第九節
- ◎第四節 ●第七節法華の科段 ●第八節佛界緣起の妙旨 ●第十節天台講經安義 ●第十一節
- ◎第五節 ●第八節蓮上人の學風 ●第九節本化獨特の五支 ●第十節文々四釋廣
- ◎第六節 ●第九節釋の概略 ●第十節章日蓮講經の要義 ●第十一節日蓮上人の學風 ●第十二節本化獨特の五支 ●第十三節
- ◎第七節 ●第十節釋文 ●科段 ●來意 ●大意 ●釋題 ●文々解釋 ●通解 ●妙解 ●異解 ●批判 ●質議 ●解決 ●字義 ●
- ◎第八節 ●第十一節參考 ●讚唱

法華は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛教教觀の實蹟にして、佛陀觀、宇宙觀、人身觀、教法觀、行法觀、その他教相教義の全般に亘りて之を調整し、發揮せるもの、苟も佛教の眞義を知らんと欲せば必ず法華經に來るべし也
古今東西の法華經觀を網羅し、特に天台と日蓮との創見を發揮して更に新考案の下に佛教の積極的統一主義を闡明したる本書は實に佛教研究の上に現代及未來の光明たらん矣

發行所

東京淺草北清島町
振替東京一二一九

統一團

我邦の文明と佛教

大僧正 本多日生

古神道とは何ぞ 法學博士 寛 克彦

日蓮主義者と菩提道 三上 義徹

近世の救濟事業 法學博士 小河滋次郎

轉教の記 活動教報

統一團翼賛員芳名錄 其他雜件數則

統一

修養上に於ける孔子の人格

文學博士 井上哲次郎

文學博士 姉崎正治君序
大僧正 本多日生師編

(第四版發行)

聖語錄

洋裝 九百頁
特製金一圓二拾錢
並製金八十五錢
郵稅 金八錢

目次

●第一發心篇○總要○感應○實在○懺悔○道義○推理●第二教相篇○總要○內外對○權實對○
絕對判●第三佛陀篇○三德○顯現○体相○智慧○慈悲○功德○力用○權佛○餘論●第四教法篇
○總要○教法○信仰○觀念の攝歸本佛の三輪●第五人身篇○通說○理具○專具○結歸●第六法
界篇○通說○述門○本門○結歸●第七本尊篇○總要○諸宗○佛陀○教法、總持、觀念○本佛の
三輪●第八行法篇○總要○信仰○安心○道義○總要、報恩、慈悲、戒法、人道、忠君、愛國、
孝養、師長、夫婦兄弟正直、勤勉等○弘通●第九得益篇○總要○總要○龍樹天親、無著○天台、妙樂、
佛、女人成佛○相對の益●第十批判篇○總要○迦葉、阿難等○龍樹天親、無著○天台、妙樂、
傳教、慈覺、智證、末學○羅什、法護○光宅、嘉祥、玄奘、慈悲(涅槃、三輪、法相)○華嚴
宗○淨土宗○禪宗○律宗●第十警策篇○對内○對外●第十二訓育篇●第十三祖傳篇
法華は佛教の綜合歸一を宣し、聖祖は各宗の積極統一を唱へたるもの、その教義の深遠に、且多方面にして
眞意を正明に會得し難きは、實に宗の内外に於ける古今の嘆聲なりき。本書は法華の三部及祖書全集に就て
之を整然たる組織の下に類聚編成せられたるもの、研究の士も布教者も、信徒も必ず一讀すべき日宗の聖典
なり

發行所

東京市淺草

統一團

大賣別所

練馬師原

須賀川

張主



我國の文明と佛教

大僧正 本多日生

佛教が我國の國民思想に多大なる關係を有つて居ると云ふことは、今更申すまでもない事ではあるが、併しながら、其關係がどう云ふ關係であるかと云ふことを、最も公平に且つ嚴密に講究して居る人は、甚だ少ない様に思はれる、我國の過去の歴史に於て、佛教が非常なる貢獻を爲して居ることは、歴史上に於て歴々掩ふべからざる事實であつて、其功は實に大なるものであると考へる、而して現代の時弊を匡救しまする上に於て、即ち健全なる國民思想を養成し、國運の健全なる發達を促がすと云ふ上に於て、佛教はどう云ふ位置に立つて居るかと申しますと、現代思想の缺陷を補ひます上に於て、又我國の思想を實現ししまする上に於

て、非常に大事なる關係を有つて居るのである、而して將來永久に此日本なり將た世界の文明を完成せしむるに於て、佛教は眞に尊とい位地にあると考へるのであります、それで此の關係を明かにするには、佛教を大觀するの必要がある、それは佛教に對する批評の殆んど總てが妄評でありまして、我國の國民の大多數が考へて居ります佛教觀なるものは甚しい誤謬でありま、罪惡であります、大なる覺醒を爲さんければならぬのであります、それは佛陀自から申されて居る如く、又諸君も會て御聽きになつたてでありませうが、大涅槃經の中に、盲人が象を探るの譬を擧げて居ります、或者は牙を捉へて大根の如きものであると言つて居り、

或者は尾を捉へて箒のやうなものであると言つて居る如く、さう云ふやうに佛教の局部を捉へて誤解して居る思想が多いと云ふことを誠められて居る。

法華經の壽量品の中に「入於憶想妄見網中」と云ふ事がありすが、非常に獨斷妄想の考を有つて居る、それが網の如くになつて、其中に頭を突き込んで出づることが出来ぬと云ふやうな次第であります。虛心坦懐に佛教の如何なるものであるかと云ふことを考へましたならば、眞に感嘆措くことが出来ぬものであります。古より佛教を批評致しました人は少なくありません、其中に於てどの批評が公平であり適切であるかと云ふことを反問致しますれば、恐らくは今日の智識に於ては一人だも公平なる批評を差出すことは出来ないと思つて居ります。昔の語にも、或人が佛教が悪いと思つて之を辯駁しやうと思ひました處が、其奥さんが言ふのに、あなたは佛教の事を一向知らぬてはありませぬか、さうだ一向知らぬ、一向知らぬけれども悪いから攻撃して見やうと思ふ、それはいけません、先づ佛教を研究して愈々是が悪いと云ふ事を捉へて、それから之を攻撃なさるが宜いと云ふので、其奥さんの話に依つて之を研究しまして遂に之を信仰し、破佛論を唱へんとした人が護法論を書いたと云ふ有名な話があります。今日の人も皆破佛論を書かんとして護法論を書く人であらうと思ひます。例を挙げれば平田篤胤先生は近代に於ける我國破佛家の泰斗であります。彼は一切經を殆ど見たと云ふ位の博覧強記の人であつて、先づ以て佛教を破るに於て佛教を見た人としては空前絶後と言つても宜い位の人であります。此平田篤胤が法華經などに付て批評して居る言葉はどうであるかと申しますと、法華經は初めから終りまで藥の効能書見たいものであつて藥が無い、何處に藥が有るのだと云ふやうな事を申して居ります。が、實に抱腹絶倒の事であります。彼は宗教と云ふものゝ如何なるものであるかを知りませぬ、法華經は劈頭から大なる宗教であつて到る處金玉の文字

である、天台を以て言へば文々句々皆眞の佛なり、一々文々是其佛と申して居りますが、斯くの如き偉大なものに對しても藥の効能書だと言つて嘲つて居ります、何れの宗教を見ても法華經に現れて居る如き高遠豊富なる宗教はありますまい、今日の文明が奮して居る有ゆる宗教を研究しましても、簡單なる法華經に現はれて居る程宗教意識の豊富なるものは其類を見ないのである、それに對して藥の効能書に過ぎぬと云ふ他は推して知るべしである。

それから今日向佛教は厭世主義であると批評されて居りますが、成程佛教には厭世の方面もあります、併しそれが一概に悪いのはありません。厭世と云ふ事も一方には眞理であります。唯だそれに捉はれるが爲に弊害を來すのであります。人生を唯だ初めより樂觀して、此人生に執着するが如き文明と云ふものは尊いものではありませぬ、總ての事柄は先づ其悲觀の方面を見次に樂觀の方面を見て、之を批評し之を發展して行くと云ふことでなければならぬ、人間でも

さうであつて、初めから修養しないで俺は偉い者である、と云ふやうな馬鹿は相手になりませぬ、佛陀が人世の悲觀を説明したのは悪い事ではありません。それを達觀せざるは佛教を知らざる者の誤りである、道に迷ふのは道を造る者の誤りではなく、迷ふ者の誤りである、道が一本筋で何處へも通ふことの出来ぬものであります。決して道の目的を達することが出来ませぬ、佛教の一部分を捉へて、佛教は厭世主義であるからいけないと言ふのは實に抱腹絶倒の至りてあります。是れ即ち象を捉へて大根と云ふのと同じであります。佛教の眞正の意義は現實と理想を調べて居る點に在るのであります。即ち世間と出世間と云ふことを常に申して居るのであります。兎に角厭世主義などを以て佛教を批評するのは大いに誤つたことであります。

又佛教の獨善主義である、自分さへ修養を積めば社會と云ふものを顧みないもので、今の文明は社會の共同生活を理想し共同發展を理想するものであるから、

現代の文明に矛盾するものであると申しますが、是は誤りである、成程佛敎には獨善の方面があります、先づ人間は自らを修養しなければならぬのでありまして、佛敎に於ても其獨を慎むと云ふ事があります、併しながら其獨りを修養したることは一人て終るものではないのであつて、佛敎では直ちに自利利他と云ふことを申して居る、自から修養を積んだ者は直ちにそれを以て他を裨益せんとする行動に出づるのであつて、佛敎には菩薩行と云ふものを説いて居る、斯の如き批評をする者は佛敎に菩薩行を説いて居ることを知らぬのである、佛敎に於て君子の道を説いて居ることを知らずに、佛敎は小人を作るものであると言ふ者がありとすれば、人は之を笑ふてあろうと思ひます、無論佛敎の或處に於ては厭世的獨善的の所はありますが、それは即ち道を作りし者の咎てはありませぬ。

又佛敎は平等主義である、故に君を蔑し父を蔑し、人倫五常を破壊するものであると言ふ人があります、が、之が最も佛敎に對する強い攻撃であります、併し

ながら佛敎は單なる平等主義ではありませぬ、佛敎は不二而二と云ふ事を教へて居るものであつて、平等と差別と云ふことを説いて居る、其點に於て佛敎は特色を有つて居るものである、模範的なものである、然るに佛敎は平等主義であると昔しの支那の儒者も、維新以前の儒者も今日或人々も言ひますが、どうも口眞似てあろうと思ふ、佛敎を研究されて何處に佛敎が平等主義であり、何等社會の秩序を顧みないと云ふことが見えますが、唯だ其一面を聞いたのでは教を立つることが出来ない、是亦大なる誤解である。

又或人は佛敎は日本に渡つて日本の歴史を汚したものであると云つて、道鏡を擧げ馬子を擧げて佛敎を攻撃致しますが、成程道鏡は悪い人であつたけれども、佛敎の感化に依て道鏡があつた云ふ悪い企てをしたのは無い、佛敎の何處を叩いて見ても、王位を覬覦するなどと云ふことはありませぬ、寧ろ彼は佛敎に背いてあつた云ふ事はしたのであります、又馬子の弑逆の如きも仔細に研究致しますれば、彼は寧ろ佛敎の中に於て

支那の弑逆の跡を見て、それが爲にあつた云ふ考を起したのかも知れぬと云ふのが一方の學說に有る位であります、が、縱し佛敎を信するが爲にさう云ふ事をしたと致しましても、それは佛敎の教義にもあらず本領にもあらずして、私の心に捕はれて行つた事である、物に弊害の伴ふのは免れぬものでありますから、不幸にして馬子が出た道鏡が出たと云ふことは、佛敎の爲に悲しむべき事でありませぬけれども、之を以て千數百年間日本の文明を翼賛して來た佛敎を、一道鏡一馬子を以て退くるは實に心の狭い者であつて、さう云ふ申しませれば、儒學を學んだ者の中にも不都合なものは澤山ある、それ故に其敎の意義がさう云ふ人間を作る傾向を有つて居るか、惡感化を有つて居るかとも云ふことを調べなければならぬのであつて、凡そ佛敎の教義其ものにありては斯かる性質を有つて居らぬ、佛敎は最も服從の精神を養ふのであつて、佛敎には四恩と云ふことを非常に強く説いて居るのみならず、人の物を盜むなど、云ふ者は決して無い、一錢銅貨一つても之を

盜むと云ふことがあるならば、非常なる罪惡として佛陀は痛切に誡めて居る、故に佛敎の感化が左様な者を産み出すなどと云ふことは絶待にありませぬが、其半面に於て日本の道を翼賛し、或は日本の天職を明かに致しました事、或は日本人の性格を作る上にいろ／＼やさしい精神を養成し、日本の文明を進歩せしめたる功は没すべからざるものであります。

又本地垂迹の説が日本の神明を汚したと云ふこととてあります、佛敎徒から考へますれば、佛敎徒あるが爲に日本の神明を汚したと云ふことはありませぬ、佛敎徒あるが爲に神を祟め神様に僧侶が仕へて別當と云ふものがありまして、神様の前に法樂を捧げて神様に仕へたのである、今の神官の仕へる儀式と佛敎徒の仕へたのと何處に違ひがある、それは唯だ形式の上に於て鈴なら鈴を振り御幣を振る方が心持がよい、經を讀んだのは何だか變てあると云ふ一種の感情論でありまして、佛敎が日本の神明に敬事したことは非常なものである、そればかりでなく今尙日本の敬神の本義を明

かにする思想は、佛教の中に最も能く説明されて居るのであります。

元來日本國は立派な理想目的を以て建設せられて居るので、頗る宏遠な意味を持つて居るのであります。日本は單に普通の考にある國家と云ふ意味でない、理想の國家である、故に國家を通つて世界的理想を實現せんとして居るものである、即ち國民の利害のみを目的として居るのでなくして、世界の文明を啓發しやう世界の人類の幸福を保障しやう、それには先以て國民の團結を鞏固にし日本の文明を發達せしめなければならぬ、其大なる理想の準備行爲として國威國光を發揚して居るのである、即ち天下を光宅すると云ふ大理想の下に立つて居る國である、さうして更に此理想を實現する中心に御皇統を戴いて居るのであるが、其御皇統は即ち天來の意義を持つて居る、即ち天徳を承けて御居てなされるので、此靈徳或は俊徳と云ふやうな無限の力が御皇室に合して居るのであつて、其意味を考へますると、即ち天業を恢弘するにある、唯だ

ばならぬと云ふ意味が即ち隨方戒と云ふのである、そこでさう云ふ誠めがあるのみならず、佛教は宇宙の真理を基礎として居るものであつて、即ち言葉を換へて云へば、天意を地上に實現せんとするものである、妙法を人類に宣傳せんとするものである、決して一國に行ふて他に行ふことの出来ないやうなものでない、佛教の理想は盡十方を貫いて居る所の道である、縦は三世を貫き横は十方に遍しと云ふ所から立つて居る道であるから、之を天業を恢弘するものであると云ふに於て少しも差支はない、其天業を恢弘することは、一面には佛教徒即ち僧侶信徒をして此理想を實現せしむるのでありますけれども、それと同時に他面には、國王大臣に向つて如來は教法を附屬して居る、國の権力と宗教の活動と共に力を協せて此理想を行ふべきものであると云ふことを申して居るのである、それは一箇所や二箇所ではない、少しく佛教を御調べになつた方は、釋迦牟尼が法を國王大臣に附したと云ふことは到る處に發見し得る所である、それであるから身國王て

人類の幸福を圖ると云ふばかりでなくして、天の精神を地上に顯現せんとするものである、是が日本の建國の精神の中に於て尤も大切な點である、さうして一方佛教は如何なるものであるかと考へますると、是は無論宗教を表として居るものでありますけれども、其所謂宗教と云ふのは、普通考へられて居る唯博愛に偏するとか個人の解脱に傾くと云ふ趣意でない、無論一面から見れば個人的であり、一面から見れば世界的であるけれども、其理想を實現するが爲には國家の存立と云ふことを認めて居る宗教である、故に國家を通じて其理想を實現せんとするものである、其處に佛教の重なる誠めとして

隨方戒

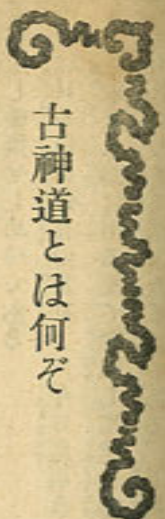
と云ふことを定められて居るのである、隨方と云ふのは其國の風俗習慣に隨ふべきもので、教は唯理論上に定められたるものを以て猥りに其國の風俗習慣を打破して行くべきものでない、其國風を尊重しなければならぬ、寧ろ貴きものがあるならば之を翼賛しなければ

ありながら佛教の宣傳に多大の功業を爲した方も少なくない、支那に佛教が渡りましても、支那の國王は佛教の宣傳に多大の力を添へて居る、日本に於ても御皇室を始めとして民間に弘まつたので、御皇室の力が其源を成して居るものであります、是れ皆佛教が國家の權威と適當なる調節を取つて進んで行くと云ふことを理想して居るからであります、恰も日本の國は國家的組織を以て世界大の理想を實現せんとするものである、佛教は宗教的理想世界的理想を以て、さうして其國家的組織に適合を取り調節を圖つて、法と國とを冥合し其理想を世界に實現せんとするものでありますから、唯だ出發點が廣い方から出て或中心に達するか、中心から出發して或廣い方へ向ふかと云ふだけではありません、其理想目的と云ふものは全然一致する所のものであります、故に日本の國は佛教的ならざるべからず佛教の教は日本のならざるべからずと云ふことが、相互に交叉して居る所の問題である、然るに今の國民は唯だ國家あるを知つて道あるを知らないやうな

傾向を示して居る、實に概はしいに至りてある。
 又現在及將來に於て佛敎の使命と云ふものは、非常に大切なるものでありまして、前來論じました如く、日本國の大理想を發揮しまする上に於て、若しくは東西の文明を融合しまする上に於て、若しくは最後の世界の文明を建設しまする上に於て、即ち第三文明を建設しまする上に於て、佛敎の地位が如何なるものであるかと云ふことを考ふるならば、眞に尊ぶべき産物であつて、日本の文明の中に於て佛敎を輕蔑するなど、云ふことは思はざるの甚しきものであると信ずる、故に先づ以てさう云ふやうな妄想誤解を一掃し來つて佛敎を大觀しなければならぬ、佛敎が此激しき文明の競争に打勝つて今日迄存續して來て居ると云ふものは、中々容易なものではありませぬので、随分佛敎には惡感を抱いて兵力を以て滅ぼそうとした事は幾度か分らぬ、支那などに於ては破佛の王様があつて佛敎を全滅せんとした事が幾たびか分りまらぬ、けれども佛敎の光は太陽の

光と同じ事、人の手を以て蔽ふことは出來ぬ、人類の有らん限り佛敎を全滅せしむると云ふことは斷じて出來るものでありませぬ、佛敎と云ふものは唯だ紙に書た文字である空論であると思つて居る人があつても、決して左様なものではない、又佛敎は印度思想であること云ふが、さう云ふものでない、固より印度に起つた佛敎ではあるが、二千數百年間他の文明に接觸して適當なる調節を取り發達しつゝあるものである、少なくとも此佛敎と云ふことを考へるに於ては、天地宇宙の實相、天地法界其物及び其中に在る所の吾々生ける衆生、人類と普通申しまするが佛敎では衆生と云ふ、人類ばかりでなく總ての生ける物、其佛陀が與へたる感化に感奮して起つた所の佛敎徒の總ての行動、其中に產出されたる佛敎史を彩つて居る事業、今の佛敎徒が生きた精神の上に於て信念を持ち感奮して居る心、是皆佛敎である、斯の如く佛敎の範圍と云ふものは非常に廣く且深いものである、總ての人が此事を考へ來るならば、如何に佛敎が我邦の文明に貢獻したる功業の偉大なる點に對して、敬虔なる態度を以て感謝を表しなければならぬと云ふ。

神道



古神道とは何ぞ

法學博士 筧 克彦

古神道とは隨神道を指すので、最初に日本民族の眞心を通じて先づ其中に實現せられた眞道である

一、古神道は「カミノミチ」「カミナガラノミチ」て一個入何某の唱へたり行ふたりした道ではない、勿論各個人を離れて存する道ではなく、各個人が其眞面目なる心證を通じて見得るのであり、其誠なる内部に存する覺悟であり、又其自由に行ひ得る道であるが、特に太郎敎じやの次郎道じやのといふものでない、又皇道でもあり民道でもあるが、斯くいふのは欲きに失するので、是等を共に包容して居る日本道である、日本民族のみに偶然特殊なる道でもない、日本民族の三つ子の魂により實現せられ、永久少くも日本民族により表

現せられたりある眞の人道であり、眞の世界道であるから、日本道等といふのは語弊がある、嘗に人道世界道たるに止まらず、人や世界やが神の大生命に歸一しつゝある場合に存する惟神道即隨神道である、人性人道世道などといふ事より、更に更に深遠なる不動の活動である

二、古神道は昔から神敎と稱へられず、神道といはれ來つた、之には深き謂れのあることである、敎とは自ら神に歸一することのみに甘せず、同時に他人をして神に歸せしめんが爲の「指さし」である、自救濟他の方便たる形式である、道は敎とは離れられぬものであるけれども、この自分が一心となつて現に神に歸一する實行をいふのである、各人に内在する最深の實在、不滅の大生命を實現することである、古神道は決して敎を輕蔑しては居らぬども、其主要とするもの其本質たる點は、少くも日本民族が人類及宇宙の表現者として其最も深き實在其大生命を實現することである、即ち道である、されば第一に、少くも皇國の政治法律道德

美術風俗習慣等に至るまで、皆古神道の顯はれてあり古神道の基礎の上に其各々の價値を有するものであつて、古神道は是等一切の普遍的根柢である、敬神の儀式や形式的の教義などに執着して居ることが其本分でない、况んや古代未開の時代の迷信やら、其頃に偶然なる形式を其本領として居るものではない、是等のものは唯僅かに其大精神を解釋する参考の材料となることのあるに過ぎぬ、第二に、此諸般の現象の根據たる古神道の活信仰にも亦特に其實修の形式がある、其最小限度の所は極めて大切であるが又極めて簡單であつて、其餘の形式は撤して各自の自由に任せてある、時代と場所、各人の趣好修養能力知識地位境遇などの差等により、各自をして任意の形式を選ばしめて居る、そして其千萬の形式により最小限度の形式並に神の道夫自身を顯現し發揚せしめつゝある

三、古神道は日本民族確存の當初より今日迄引き續き存在し、尙未來永劫に至るまで繼續して愈々益々發揚擴張せられつゝある活きたる道である、其道を指

す形式や實修方法や、法律政治道德等の關係は、益々進歩し發達しつゝあれども、其活生命其大精神に至つては滄りはない、愈々複雑微妙に實現せらるゝも、其道の精神や生命やが別に新たにたつたものではない、古神道の發達性あることは顯著なれども、日に日に別の道になるのではない、然し其顯現する所は常に最も新たであつて、日に日に新にして又日に新なるが故に最も新なる教であつて凝然不動の陳腐な教ではない、此點よりいへば實に古神道に古といふ形容詞を附けることも、新といふ形容詞を加ふることも不入用である、古神道と呼ぶは權りの名稱である、然し近世に惟新道を標榜する幾多の神道が唱へられて、其後も兎角新奇なる神道を唱へ出し、古今に亘り一貫せる本來の活精神を没却し、一切の生活の根柢たる大生命を忘るゝ通弊があるから、斯かる流行に對し特に之を反省せしむるが爲に、ルネッサンスの意味を強めるが爲に便宜上古の字を冠せしめて置くのである、恰かも出生時より入棺時に至るまでの不動の活精神を三つ子の魂と呼

ぶ様なものである、三つ子の魂と呼ぶからとて青年時代に無くなる魂ではない、百までも活躍して居る者を指していふので、成長すれば無くなるものは淺薄偶然なる心理作用に外ならぬ

古神道も日本民族が未開であつた頃には、其教義や其有する各般の形式に於て幼稚であつたに相違ない、釋迦牟尼其他の偉聖も、亦赤兒の時にはオギャアオギャアといふて居られたのではあるまいか、此子供が既に其内に充ち満ちて包蔵して居られた大精神を發揚せられたる所が聖子である、偉聖が赤子であつたことの爲に其本來の面目を毀つて其價値を損するなどといふことは決して無い、古神道も夫と同じで、古代に幼稚の形式があり、偶然不純の事柄が存して居つたからとて、其活きたる道の神聖なることに少しも増減する所がない、否否小供の時より繼續しつゝある一貫せる創設力に富んで居る唯一の生命たる點は愈々以て尊いことと思ふ、古神道は皇國の國體の如く、革命により生命を更新して始めて進歩し得るなどといふものではな

く、始めより同一生命を保ちつゝ愈々發揚實現せられつゝある、是は即ち其根柢の大生命精神が當初より生きて居つたことの何よりの證據である

古神道は天皇道人民道を網羅する日本道である、日本に偶然なる道ではなく人道であり、人道の最も深みに存し其根源たる眞道即ち隨神道である、古今未來に亘りて溢りなき眞の道である、隨つて昨今出來たものではなく古きものである、故に之を研究する方法はと云へば、人類たる日本人各自が、自分の憤怒や愛憎や出來心などを捨離し、其心の眞面目に信頼することが最も大切で、之が最も統括的の要件である、古神道は世界の人間たる根據に立てる日本人の眞面目、最も深き實在的活生命中に之と離れずに現に輝きつゝあるものであつて、古典やなどは、古神道を示す指を更に指さすものである、されば、古典其他古の制度道德風俗習慣などを材料として、古典等の文辭的論理的實證論的研究などをするのも元より必要ではあるが、先づ内部に活躍せる大精神を修養し之を内觀し、あらゆ

る手段により之を分析してこそ、眞の活きた神道を證得することが出来るのである、古典其他のものは何處までも従つてあつて、祖先傳來の普遍的活生命が主である、古典等の穩健なる解釋をすることにも既に先づ各人の心持を眞面目にし深くすることが大切である、之は何教の經典につきても同様であると思ふ

古典や風俗習慣等を活かして解釋することは各自の深き内部に信頼することが最も必要である、皇國の根柢たり萬邦の精華たる古神道は之によりてのみ觀察し得分析し得るので、其爲に其解釋が何某の私の見解とはならぬ、活きたる道を活かして見るには活きた心を以てせねばならぬ、各自の自由心證を輕蔑し他人の設けた形式に盲従し、時勢の變遷にも拘はらず舊套の外形を墨守するのは、公道を明らかにし神道に従ふ所以ではなく、古典の作者の鑄形に屈服するのであり、之を獨斷的に解釋する者の私見に拘束せらるることとなる、古典や經典や在來の儀式は尊重せねばならぬけれども、各人の證得したる生活經驗に基き、各自の立場

め、其の民族の根柢であり活生命である、道や教やを匡し發揚することが第一着の事業である

一、一體各人が其好む所の教を奉じ信ずる所の道を踏まんとすることは然もあるべきことである、が之の自分其教を信奉することを以て満足せず、他人の誘導すること亦誠に美なることである、然し乍ら其爲めに他人の信奉する教や他人が踏みつゝある道を打破して他人を強制壓迫することは甚だ誤つて居る、之は他人を救済する所ではない他人の自由心證を無視し、其特殊の趣好地域境遇を否定するものであつて、人物を敎するものである、自己の信仰其信奉する宗教を以て、他の信仰や宗教の缺點を救済し之を擴張せしめ、他をして萎縮に陥らざらしむるは誠に必要のことである、従つて自分の宗教の美點を廣く説き、自己の信仰を己で私致すまいとするのは誠に美事である、けれども他の信仰宗教を排斥し之を撲滅せんとするなどといふことは陋劣の極である、他人や他の信仰宗教を救済し法律制度を匡正することこそ、普慈博愛を旨とする宗

から、其内部の活きた實在を顯現することと離れずに古典等を解釋する事を要し、此機運に向ひつつあるは喜ばしいことである、そこで各自の活精神を外にして見得るものは死したる陳腐の形式であるので、斯様に死んだ形式は、誠の古神道ではなく、昔時古神道に附着して居つた不潔に外ならぬ、如何なる宗教にも此種の不淨や偶然の雜つて居たこと又現に混入して居るとは、之を拒否するわけに行かぬ、されば昔し古神道に偶々何等かの雜り物が附着して居つたからして此雜り物のみを古神道と看做し、誠の生命ある活きた道を其以外のものと思ふ様なことは、公平なる見方とは申されぬ

吾人は如何なる學問を修めて居ろうが職業を營んで居ろうが、又如何なる宗教を奉じて居ろうが、此長き歴史を有する活きた道を發揚する權利と義務とがあり、之を理想とすることが情である、殊に個人の救済に熱心なる人々は、先づ自己から救済してかからねばならぬので、大なる自己である、自國自民族の濟度から始

教と云へる、斬殺せらるべき人でも之を救済してやるのが當り前であるのに、人格者の内心の自由心證に基き奉じて居る宗教や信仰を、殺傷したり死刑に處したりすることを何よりも良き事と思ひ、一も二もなく殉教者などの形式を標榜し、異教の壓迫に對し自己の信念を固守するに非ずして、異教を排斥することを主眼とする習慣を旗標とするなどは、蓋し宗教家が教はんとして居る凡俗人よりも遙かに劣るものである

繰返していへば自分が心の底より信仰する教を擴張し、之により迷信や無用の形式を交へて居る他の宗教を救済し、其不純の要素を拭ひ去ることに助力し、根本的ならぬ宗教に發達の途を指示してやることは、此上もなく必要なれども、他の宗教とさへいへば一概に之を劣等なるものと獨斷して置いて、之を破壊することを主義として居るのは、不仁不義の行である、博愛の義を悟らぬ行動である、まして古神道の如く、少くも皇國建國の基礎であり獨斷の無い公平なる眞の神の道であり、一切の哲理と調和し得る健全なる宗教にし

て、其根底の上に其お陰により少くも日本民族の生活並に皇國の國體が繁榮しつつあるものに對して、其存在を無視するが如き宗教家あらば夫れは大きな心得違ひであると思ふ、宗教の如きものの性質として、自己の信仰の善美なることを主張し他を救済するに熱烈なる餘り、他と争端を開くことは悪いこととは思はぬが、大體の心持が外教を尊重し立を救済するつもりで行動せねばならぬと考へる、排他的獨占的專制的の宗教は將來文明國の眞の宗教たる價値あるものであるうか二、斯く申すのは、宗教や信仰は何んでも宜しいといふことではない、雄偉にして健全なる宗教を信奉することを要する、救済することも出来ぬ劣等なる宗教は健全なる宗教の擴張と共に自ら消滅することとなり、健全雄偉なる大宗教は自ら歸一することとなる、自ら歸一といへば語弊がある、必然的に一になり、唯一の教になつてしまふといふことではない、宗教が己のみに偶然なる獨斷迷信態に拘泥せず、其眞正の活生命を發揚する爲には、互に己を他の宗教に擴張して

他の健全なる精神を採納し、他の確實雄偉なる生命により保障せしむることが入用である、之と同時に健全なる宗教たる以上は、自己の長所を以て互に他の短所を救済してやることが必要である、茲に於てか有無相通じ、長短相補ひ、互が其不純を去り、其内部に於て其の宗教の活きたる生命を統括することとなり、各教は各其獨立自存を固守し乍ら、皆互に圓滿に融合調和し提携しつつ、眞の神の道を發揚しつつある眞宗教となるのである、斯く各教が夫れ夫れ他の一切の教を自己内部に統括することを客觀的の立場から見ても教の歸一といふのである

三、然らば古神道は如何であるかといふと、其内容に於て教義として分折せられねばならぬことは澤山あるが、其容積に於ては古來極めて宏量のものであつて、一切の宗教を包容し得て綽綽として餘裕のあるものである、然も古神道は日本民族日本國の一員として當然其信仰者たるを失はぬ、日本人たる各個人は日本人であり人間である、人間ではあるが日本人たることを

以て人間である、日本人たることを捨てて人間に計りならうと思ふてもそれはだめじや、まして直ちに西洋人のみとはなれぬ、外國に歸化すれば認定法上は西洋人にもなれるが、矢張り日本人たる三つ子の魂は伴つて居る、されば人間として人間の道や教を信奉するのは誠に結構のことではあるが、尙日本人たることを失ふわけには行かぬので、古神道の如き日本人の道、否人間たる日本人の道の如きは少くも日本人たる以上は其奉ずる宗教の如何に拘はらず常に信仰せねばならぬ次第のものである、而して古神道は宏大寛厚のもの故之に屬して居るからといふて、他の宗教の信者たることを排斥するなどといふことではない、又古神道とても不純の點や迷信などが絶對には無いといはれぬ故、是等の點につきては、凡そ日本人たるものは、各其眞面目に見る所を以て進んで救済することを圖らねばならぬ、他の信仰の救済よりも最も手近なる自分の古神道を救済することが先じや、要するに古神道の缺點を指摘することは誠に宜しい、之を排斥したり棄却したり

して顧みぬのは大なる過誤である

尙終りに古人の憂言を附記して置く、曰く「自分の國の教が劣等なりとて、之を捨てて直ちに外國の教に降參するなどと申すことは誠に活地のないこととござる、自國の教が不完全ぢやと思ふたら先づ之を完全にすることに努力せねばなるまい、自分だめぢやからとて勇氣も希望も熱情も捨て去り、自分の奥底の信仰生命までをも捨て去つて、他人根性になろうなどと申すは以ての外の心得違ひてござる、彼等はたゞ教界一時の優者に附和雷同し盲従し、其草履取をなすといふ諺を免れぬてござる」と、其言は元より過激であるが少しは無理の無い所もある、日本人として佛教なり基督教なりを信ずるのは、即ち古神道者として外教の長所を我に採納し統括する所以であり、外教を以て古神道の表現とし其延長とする所以であるから、斯かる眞面目なる日本人は愈々澤山無ければならぬので、此古人の言は此點につきては過激であるが、考一考することは無用でない



日蓮主義者と碁道

三 上 義 徹

世に碁を圍むものと否とを問はず、本因坊の名を知らざるものなし、碁道の泰斗として皆其名を知る、然れども未だ本因坊の爲人を知るものは少なき也。碁道の泰斗、本因坊は京都の産也、歳十三、安土問答の法務久遠院日淵上人に就て薙髮染衣の式を擧ぐ、爾來刻苦精勵一代の教相を研尋し、後年江州三井寺に入りて顯密の教系を窺ひ、比叡山に登りて一心三觀の月を詠め、又諸聖名匠の門を叩へて百家の説を究め、悉く蘊奥を探りて學徳並び具ふ、而して師日淵上人、常に日蓮魂の氣魄を發揮して菩薩の妙行に勵み、軟弱なる佛教徒に痛棒を加へて硬骨の名一世に高し、亦豊臣秀吉織田信長徳川家康等の諸公に誨へて盛んに日蓮主義の法鼓を鳴らして已まず、時に本因坊常に之に隨ひ、

堂々として侃諤の論議を宣へて諸公の肺腑を衝く、聞く師日淵上人が各地に於ける教義上の問答記録は、多く本因坊の手に成りしものなりと云ふ、若夫之を繕かば當年活動の意氣に感乎し、肉躍り血熱して精進の志氣自から昂るものあるを覺ゆ、本因坊學識豊富にして識見卓越、風尚尤も凡を超ゆ、後、奮闘の功成りて京都本山寂光寺二代の眞主となる、南船北馬行化普く布きて信徒の渴仰甚だ厚し、又數次朝廷に伺候して大法無盡の妙益を講じ奉る、特に御威を辱なふして權大僧都の位階を賜はらる、後輩を弟子日榮に譲りて居を寂光寺境内本因坊に構へ、碁道の秘奥を當年の名士に授く、碁道の機微、蓋し之を稽ふるに法華信仰を透ふして妙味を存す、本因坊即ち然る也、故に若し然らずんば、如何に名手なりと稱せらるるも是れ荒蕪なるのみ、所謂碁道にあらず、唯だ徒らに黑白の石を列ぶるに過ぎざるものか、碁道は悟道也、道を離れたる圍碁は何等の意義を存せず、碁道の極致、是れ必ず法華の包容統一の識見に憑りて甚深の開顯會通を與ふべき

もの也

彼の名高き本証寺役の夜、本因坊は信長に碁を指南しつゝありしが、圍碁半ばにして劫を生ぜり、而かも三ツの劫にてありしかば、本因坊石を投じ慨然として云はく、三劫とは古今未だ曾て見聞せざる所、是即ち今宵天地震動の變兆ぞかし、須らく織田公には變に處する用意あるべしと言ひ殘して自坊に歸來せり、あゝ其夜半、我敵正在本能寺と叫んで歴史上名高き大激戦を演ぜしにあらずや、本因坊の神祕的豫言、是即碁道の妙致に達し來り



らず、特に本因坊の一貫せる思想信仰を窺ふて碁道の妙味に觸るるを要す

爰に掲ぐる本因坊本行院日海上人の肖像は、寄月、記者京都寂光寺に隨て得たるもの、國中肖像の上に南無妙法蓮華經と大書せられ右に日、左に月の形を畫き、法衣を纏ひ念珠を懸け笏を持し、威儀誠に嚴肅也、新しく始めて眞に碁を圍むを得べきものか

て天地に感應したる妙力の結果也、彼は宗教家にして碁道に達し、又當年の軍略家にてありし也、彼は天海僧正と相並んで二大軍僧と稱せられ、百二十萬石の加州侯に聘せられて軍事上の智謀を廻らす所甚だ多し、而して金澤に在るの時、一面宗教的事業に精勵して熱

烈なる信徒を養ひ、一精舎本行寺を創立す、彼は秀吉公より三十石を贈られ、徳川家康公より五十石の知行を受く、彼は確かに一代の傑傑也、彼れの碁道は隱居仕事の遊戯にあらず、人間性の五根を圓滿に修養し鍛練せんが爲也、今の世の人、自己の生活豊かなるもの遊び道具として碁を弄ぶあり、又劇務に在るもの碁を圍みて自から餘裕ありと稱す、然れども之等は碁道の本義を知らざるものもの痴言のみ、苟くも碁を圍むもの、碁道の歴史の徑路を心得ざる可

修養上に於ける孔子の人格

文學博士 井上哲次郎

諸君、諸君は孔子の事は既に御存じのことでありませう、餘り珍らしくないと云ふ御考への人もあるかも知れませぬが併し孔子と云ふ人は面白味の多い人でありませぬ、世界の歴史に偉人と稱するやうな人が大勢出て居りますけれども、其中で孔子は一種特色のある人でありませぬ、其特色の點に至つては又殆んど比較はない、それは孔子は非常に立派な人格の人であります、さうして誠に缺點の無い圓滿なる人格である、西洋ではソクラテスが聖人と云つても差支ないやうな偉大な人格で、希臘の哲學を開いたと申しましてはちよつとの確でありませぬが、併し希臘の哲學は重にソクラテスに依つて起つたものであります、ソクラテスは非常

な人である、ソクラテスと孔子とは東西相對立して居る偉大なる人格でありまして、餘程好い匹敵でありませぬ、てありまするがソクラテスと孔子と比べますると孔子の方が極めて圓滿であると云ふことに於ては優つて居る、ソクラテスはどうか云ふ事をした人かと言ふと中々立派な人でありませぬが、毎日々々市場に行つたり運動場に行つたりあつちこつちに出掛けて、さうして誰でも物事を知つて居りさうな人を捕まへて議論をして段々追究して困らした人でありませぬ、誰でも物事を知つて居ると思ふが本當は知つて居らぬので、本當に問答をして問詰めて見ると、知つて居ると思ふやうな人も次第々々に分らなくなつて仕舞ふ、それをソクラテスは頻りに歎きました、さう云ふ所は餘程形角があります、孔子はさう云ふことはしませぬ、孔子はさうして違ふ、其代りにはソクラテスの方が又或點に於ては孔子より優つて居ります、ソクラテスは中々論理的の頭腦を持つて居りました、人と問答するにしても單純なことではない、中々細かく論じ詰めます、哲理を

明かにするてなければ止まないと云ふ所まで行きまして、哲學的の頭腦を持つて居ります、其所になるとソクラテスの方が孔子より優つて居る、中々理論に達して居ると云ふやうな所は確にソクラテスの方が上であります、けれども孔子は圓滿な誠に立派な人である、孔子のやうな人は此點に於ては世界に殆ど匹敵はないかと思はれる位の人である、それでありませぬから孔子は矢張り今日でも人間の歴史に於て現れたる最も偉大なる一人に數へるのであります

それで孔子を研究すると云ふことは決して無駄ではない、中々色々な有益な結果があります、先づ第一に孔子が修養の點からして研究する價値が多いのであります、即ち道徳を修養する、品性を修養する上から見て孔子を研究することは一方ならぬ趣味があるのです、あります、それは勿論孔子の人格は立派であつたと言へばそれの切りてありますけれども唯それだけでは足りませぬ、孔子は普通の人が段々修養を積んで大聖人とも言はれる人になつたのであります、孔子は當り前の

人です、而も普通の人と云ふのみならずごく貧乏な家へ生れました、おつと遠い先祖は立派な先祖でありませぬけれども孔子の生れた家はごく寒微な家でありました、我は若うして賤しと論語の中に言つてあります、史記には孔子貧にして且つ賤しとありますやうに貧賤の身であります、さうして孔子の父は早く亡くなられました、阿母さんだけ少し後とまで生きて居りましたけれども是も孔子の青年時代に亡くなりました、それで孔子は殆ど獨身者のやうになりました、尤も孔子は兄さんがありましたが此兄さんはごく詰らない人で一向孔子の助けになつて居りませぬ、兄さんがあつたと云ふことは論語にありますが此兄さんは跛であつたと云ふことだけが言傳へてあるだけで何も分らぬ、孔子は兎に角次男でありますけれども兄さんは頼りのない人であつた獨りて生活を營まんければならぬやうな境遇に立ちました、殆ど孤兒のやうな有様でありました、孔子は中々勉強しました、一時は小さな官吏にもなりまして大變成績は良かった、けれどもそれは永くや

らずに止めまして更に勉強しました普通の學生です、其所がどう云ふ人にも手本になる、マア多數の學生と云ふ者は金持でない、金持の學生も稀にはありますけれどもそれは十人に一人有るか無いかで、大多數の學生と云ふ者は貧乏である、其貧乏な學生の爲には餘程好い手本を示して居る、孔子は其貧乏なる家から出て次第々々に修養を重ねて偉大なる人格となり、人間の歴史に磨滅すべからざる痕跡を遺したと云ふ所が孔子のえらい所、て手本として學ばうと云ふのには孔子のやうな工合に手近い人でないと學ばれない、餘り生れた家柄が違ふとか何とかすると中々むづかしいのであります、非常に高い位の人だとか何とか云ふのは眞似やうとしても餘程むづかしいことがあります、けれども孔子は普通の人です、それがあゝ云ふ風にえらい人になつた、それが餘程好い手本を示して居ります、此點に於ては稀なる人である

修養の上から見て非常に孔子はえらい、修養と云ひますけれども道徳を能く修めた人でありませぬ、それか

ふ所を十五歳から漸く始めた、随分晚い、今日の兒童に比べると云ふと學問に志したのが大分晚い、どうも家が貧乏でさう云ふ又適當な學校も出来て居らなかつたものでありますから晚い、晚いけれども自分でやうと云ふ考になつたのが十有五である、けれどもそれから遣り始めまして「三十而立」三十になつた時は餘程堅固な心を立てた、必ずやり遂げると決心しまして非常に勉強しました、孔子は中々勉強しました、逆も當り前の人のやることと違ふ、或人が孔子はどう云ふ人であるかと云ふことを聞きました、それを直接に孔子に聞くことは出来ませぬから孔子の弟子の子路に尋ねた、子路がちよつと簡單に言悪いから言はなかつた、あとで其ことを孔子に話した所が、孔子が斯う言つた「女奚不曰」なぜ言はなかつた、殘金なことだと斯う言つて、どう言つたら宜いかと云ふと自分で斯う言ふ、乃公は斯う云ふ人間だと斯う言はなくては行かぬ、それはどう言つたか「發憤忘食樂以忘憂不知老之將至云爾」斯う言ふて答へなくては行かぬ、馬鹿な奴

ら最も努めたのは矢張り學問です、けれども性質が非常に穩かな人でありませぬ、温良恭儉讓と論語にもあります、誠に温厚な人でありませぬ、尤も其中に又何所やら威嚴のあるやうな、威あつて猛からず誠に心に折合のあつた人でありませぬ、さう云ふ良い性質の人である上に大變勉強した、其勉強が中々少々でない非常な勉強である、それで非常な謙遜な人でありませぬ、唯學問と云ふ一點に於ては決して謙遜して居りませぬ、「十室之邑必有忠信如丘者焉」、十軒も家のある所には忠信と云ふ上に於ては自分のやうな者もあらう、併し「不如此丘之好學也」自分ほど學を好む者は無いぞ、此點に於て決して人に譲らぬ、是が孔子の中々勉強して熱心にやり上げた所でありませぬ、それで孔子は自分のことを自から言ひました、自分の經歷を「吾十有五而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩」と云つて一代のことを簡單に述べてあります、案外晩學でありませぬ、今ならもう六七歳で小學校へ行くと云

だ、野暮な奴だ、なぜ言はなかつた「發憤忘食」發憤と云ふ字は此所から起つた、發憤して勉強しなくちやならぬ、孔子のやうな普通の人が偉大なる人格にならうと云ふのには當り前のこととなつたんぢやない、それは自分の心からやらなくてはならぬと云ふ勵みが出て來なければならぬ人間にはなれない、人から勧められて學校に行けと言はれていや／＼ながら學校に行く奴は良い成績は得られない、どうしても自分でやらずにやら行かぬ、やるぞ、きつとやると決心して命賭にならぬと本物になれませぬ、死を賭してやるから本當の赤心と云ふものが現はれる、乃木大將でも切腹して見れば疑ふことは出来ませぬ、命を捧げて掛かる、どうしても乃木大將だ、至誠日月を貫くと云ふのは其所だ、乃木大將は平生立派な人だから誰も其忠誠を疑ふことはせぬが、最後の死に依て愈々一點も疑ふことは出來ない、乃木大將の忠誠一命を捧げて居られたと云ふことは死を以て證明する、どうしても命賭にならなければ本當の赤心と云ふものが現れない、其決心が

本當に學問を大成せしむる所以である、孔子がえらくなつたのもそれなんだ、やらなくてはならぬと云ふことを自分の心の中に決し、自分から發憤してやる、さうして食事の時が來ても覺えない程熱中する、孔子は熱中する人であり、熱中する所まで行かなければ學問と云ふものは本當に進まぬ、熱心に他のことを一切忘れると云ふ所まで行かんければ決して成績は擧がるものでない、何でもさうてあります、それだからして本當に熱中したら食を忘れる、それが普通の者は食を忘れる所ぢやない、中々忘れはせぬ、十二時になつたからもう持つて來さうなもの、十二時半になつても未だ持つて來ない、頓てもない方に發憤する、憤を發する方面が違ふ、それが小人の常だ、聖賢の分れる所はさう云ふ所にある、孔子のやうな人は食物を忘れる程高尚な側に熱心になつて居つて、熱心な方面が違ふ、さう云ふことがなくてはあんなえらい人が出來る筈はない、それですな、他に孔子は何も奇蹟はない、不思議もなければ何等の秘密もない、何にも乃公

必ず其味が出て來ます、それで面白くなつて來れば次第に憂を忘れる色々なくよゝしたことがあつても消失して仕舞ふ、丁度春風が殘雪を消すが如くに憂を忘れて愉快で堪らぬ、それで孔子は年老るのを少しも覺えなかつた、斯う云つて答へなくては行かぬと子路に言つた、乃公は斯う云ふ人間だと自分で言つた、是は孔子の考であつたに相違ない、易の乾卦であつたと思ひますが斯う云ふことがある、「天行健君子以自強不息」是は何を言つたのかと云ふと天地の運行が健かに冬がいつ迄も續きはしない、冬が去れば春になり春が過ぐれば夏になり夏が過ぐれば秋になる、間違なく行く所が天行健なる所である、其行く所を真似て人間も努力せなければならぬ油断してはならぬ、暫くも息むなく天地運行の規則立つた働きを爲す如く、君子も自強して息まない、戊申詔書の自強と云ふ文字は此所から出たので、何所までも續けてやらなくてはならぬ、孔子にあらざれば斯う云ふ考の出る筈はない、それで論語を開けて見ると、真先に何が書いてある

は隠して居ることはないぞと門人に言つて居る所があります、さう云ふ譯でありまして孔子に秘密は別にな、聖人となつたら何か不思議な種でも持つて居るのではないかと思ふが何にも無い、門人が疑つたものと見え、それだから「二三子以我爲隱手。吾無隱乎爾。吾無行而與二三子者。是丘也」と斯う言つた、實に公明正大、さう云ふ譯の人でありまして唯發憤してやります、發憤も食を忘るゝ所までやる、さうして「樂以忘憂」愉快で堪らない、實に面白い、此面白味の出た時はずつと進んだ時であります、いや／＼ながら勉強してもちよつとも面白くない、初めは何をやつても少しうるさい、うるさいけれどもやつて見やうと云つて強めてやるやうでは中々進まぬ、本當にやる氣で始めると次第に面白くなる、どんな學問でもどんな技藝でも本當に熱心を籠めてやれば必ず面白い、趣味が出て何とも言へない味の出るものであります、そこで「樂以忘憂」、此樂しみは今のやうな憤りを發してやると云ふ所まで行つて本當にやつて行けば

「子曰學而時習之不亦樂乎」何でもないやうだが此何でもない中に非常なことが意味されて居る、高尚な學問をして一々それを復習して味はつて見る、實に悦ばしいことぢやないか、唯悦ばしいのではない實に悦ばしいことではないかどうだいと斯う云ふ、是が論語の開卷第一に書いてある、其次には「有朋自遠方來不亦樂乎」友達が遠方から來て共々に修養のことを話したり學問のことを話したりする樂しいことではないかどうである、愉快ではないか、此悦ばしいと云ひ樂しいと云ふことを真先に書いてある、其所が効能のある所で、修養の結果ではあるが唯修養すると云つても修養は出來させぬ、修養に關係のある學問をするさう云ふ勵みが起る、赤心を以て熱心になつてやればひとりでに悪いことは出來なくなる、どうしても本當に徹底したる知識が備はつて來ますと馬鹿なことは出來ない、悪い事をすれば悪い結果が自分の身に來るから出來なくなつて來る、孔子は熱心に勉強をして知識を磨き上げた結果、元來立派な精神の人が益々

立派な人になりました、さうして實に此千載道徳の師たる、支那、朝鮮、日本、東方諸國の風教の源を成したと云ふことは非常なえらい感化であります、それが何所にさう云ふ秘訣があつたかと言ふと別に秘訣はない、さう云ふ熱心な勉強の結果其所に來つたと云ふことを見なければならぬ、其所を能く考へなくてはなりません、それでありますから孔子は多くの人の修養の根本になる、どうしても修養すべき根本が要ります、やつて見せた人が無くてはならぬ生きて居る人ではそれ程には思はぬし、どう云ふ人でもさう云ふ風に見ませぬし、さうして又滅多にそんな人はあるべきものではない、稀に人間の歴史に斯う云ふ人を得たことがある、孔子が其一人である、だからして孔子のやうな偉大な人格を修養の根本にすると云ふことは大切なことである、さう云ふ人が出て居らぬとどう云ふ風にやつて宜いからぬ、兎に角孔子はやつて見せた、さうして又餘り極端なことをやつて居りませぬ、極端な事と云ふものはちよつと面白いので中々人の注意を惹く、變なこと

を人が始めると皆寄つてたかつて見る、是はちよつと面白い、併し餘り極端なことをやつたのは注意は惹くけれども根本にはなりません、孔子は何にも極端なことをやつて居りませぬ、實に普通の軌道を辿つて海外に出て居らぬ、人間の行くべき道を唯行つた、あれが若し中位の所に止まつたならば平凡に過ぎないけれども、平凡の儘にずつと大きくなつて非常なえらい者になつた、そこがむづかしい、仕易くしてむづかしい、むづかしいが仕易い、平凡の道を行くのですから或程度までは行易い、孔子は其點から見まして非常に修養の根本になるのであります

日 一切の善根の中には孝養第一にて
 上 候なれば、まして法華經の行者に
 人 て御坐します、金の器に淨き水を
 の 入れたるが如く、少しも漏るべか
 聖 らず候、目出たし目出たし
 訓

會 社

近世の救濟事業

法學博士 小河滋次郎

近年また各國に於て憂ふべき現象は、即ち生兒の死亡率の多いことである、之れが原因としては生活難の逼迫と共に婦人が過激の勞働に従事する、従つて其の健康を害するに至ること、又生活難の爲に兒童の保育上で手當が不十分であること、婦人の教育が行届かざること、母乳に代ふるに牛乳を以てする事等である、殊に我國に於ては此兒童死亡率が年々増加の状態にある、歐洲各國に於ては夙に之れが豫防法を講じつゝあるが爲めに減少しつゝあるが、我邦には未だ之れが豫防法すらも講じられて居ない、如斯事實は國民の不健全なる發達を來す所以であつて其の實質を益々惡化せしめ我國の前途實に憂ふべきものがある、斯る原因に依つ

て國民病と稱する、肺病花柳病等の増加をも來すが故に實に寒心に堪へない次第である
 茲に於てか諸外國に於ても此の方面に於ける學者の研究が益々盛んになつて來た、所が歐米の學者は我國を稱して、兒童のパラダイスであると云つて居る、日本は兒童の保護が非常に行届いて居る、實に日本は兒童に取つての極樂地であると、乍ら然れども尙に皮相の見であつて、一見我國の家庭と外國の中流に於ける家庭とを比較する時は、我國の家庭が兒童を愛することの優れるが如く見ゆるも、之れは全く表面の觀察に過ぎない、成程外國に於ては家庭に於て兒供はコンマ以下に待遇されて居る、之れに反して我國の家庭に於ける兒供の地位は頗る高いものである、が實際に於ては中流以上の家庭に在つては乳母をかせ、下女をかせてあつて、又下層社會に在つては、夫婦共稼をせねばならず、従つて幼い姉妹に兒守をさせ、或は老婆に預けて行くが如き有様である、或は又學齡に達しても家業の手傳をさせて學校に入れず甚だしきは行商などをさ

する者さへある、尙又日本に於ける児童保護事業の不完全なるは彼の幼稚園の設備を見てもわかる、一體幼稚園は一千八百四十年英國のフレイベルが起した時の目的は教育の豫備のつもりであつた、處が漸次家庭に代つて保護救済をするに云ふ意味に變つて來た、日本に於ける幼稚園の現状の如きも、全く中流以上の児童を預つて之れを保護教養して居るのである、斯くの如きは實に不自然であつて徒らに家庭の任務を閉却せしむるのみであつて、其の弊害は夥しいものである、然るに我國の家庭は實に此の任務を閉却して居る、或は輕々しく里子に預けるが如き児童の將來に取つて實に危険なるものである、児童の愛養保護の至らざる處よりして不良少年を出す實例は澤山ある、或は又扶助料を添へて幼児を他に與へるが如き其の弊害や恐るべきである、其の扶助料と云ふも實は葬式料である、他人の子供を貰ふ様な人は大抵扶助料を目的として貰ふのであつて扶助料が無くなると子供の養育はあろそかになつて仕舞つて、遂には子供の生命を危うからしむ

るに至るのである、然るに我邦に於ては之れが取締法に就ても甚だ不完全である、又彼の孤兒院、養育院、或は育兒院の如きも其の内容は極めて不完全である、之等の機關に於ては單に児童を集めて居るばかりであつて、之れが相當の保護を與へて居ない、故に却つて不幸なる結果を來し、児童の運命に就いては憐むべきものである、殊に甚しきに至つては之等の憐む可き児童を利用してはならない悪用して、物品を行商させるとか或は活動寫眞をなすとか、児童を保護するに非ずして虐待するものである、斯の如きは抑々児童の前途を憂らしむる最大原因である、尙ほ我國にては下層社會に於ける盲兒及啞童に對する保護の機關が備つて居ない、之れも亦外國にては完全に備へられてある、殊に獨逸の如き昨年盲啞の児童をして義務教育を受けしめる規則が布かれた、又貧民の児童を保護する爲めの幼稚園が特に設立された、要するに我國に於ける児童の保護教養は不完全である、其の著しき例としては官設の專賣局に於て學齡中の児童を使役するが如き、

殊に甚だしきに至つては彼の貧兒の新聞賣子に對して區役所などにて賞與を爲すなどは實に矛盾撞着の極みであつて児童虐待を獎勵するが如きもの實に言語同斷と云はねばならぬ、斯く觀察し來る時は、何處を以て我國は兒童の極樂地であると云はるゝてあらうか、否日本は却つて兒童の地獄である、乍然一面から見れば我國は古來より兒童愛養の美風が無いてはなかつた、即ち今日の富強文明を來したのも之れが大なる原因をなして居る處が世の進むに従つて之れ等の美風は類廢に傾いて來たのである、故に吾人は須らく之れが救済の名實を全ふすべく益々奮勵しなければならぬ、之等の救済事業を閉却せる報ひとしては、即ち犯罪者を多く出すに至る、從つて社會國家の安寧秩序を計ることは能きない、吾人は先づ社會問題の大半を解決せんとせば、以上述べたるが如き救済問題を第一着手とせねばならぬ、殊に私は之れが局に當るべく當然の責任を有する宗教家教育家の反省を促し度いのである、而して眞の意味ある救済の本義を明かにして貰ひ度い

ものである、以上稍々冗漫に亘りたれども、現代の救済事業に就ての私一個の意見を述べた次第である。

統一團翼賛員芳名錄 (第五回)

- 東京淺草新谷町寛受院 (乙通) 田島 義 潤
- 同所 (贊助) 田島 のぶ
- 千葉長生郡新治村蓮華寺 (贊助) 齊藤 義 監
- 京都府丹波知井村知見 (贊助) 大塚 靜

統一團翼賛員寄附金受領報告

(大正二年五月迄領收)

- 金六圓也 元、九—二、二 上島 高次郎殿
- 金六拾錢 同 笹本 春義殿
- 金參拾錢 二、一—十二 關根 孝助殿
- 金參圓也 二、三—八 宇田川繁次郎殿
- 金參十錢 二、一—三 高田 久次殿
- 金二拾七錢 臨時 戶村 清次郎殿
- 金壹圓廿錢 二、一—二二 齊藤 藤四郎殿
- 金五拾圓也 (第一回) 齊藤 信四郎殿
- 金壹圓也 小笠原 義 監殿
- 安田 清海殿

轉教の記

三上白碧

「説ひいかなるわづらはしき事ありとも夢になして只法華經の事のみさはくり給ふべし」との聖訓、吾等教徒が世に處する態度を垂訓せられたるもので、此の信念を養ふことこそ大事である。予は栃木縣下に於ける寺院の經營及び其信仰状態を調査すべき役目を負ひて居るので、四月十四日午前九時上野發着切符の客となつた。列車には男性三十二名女性七名の乗客があつて、一室何となく賑やかであつたが、成金紳士が三分の領域を占めて得意がうつて居るのと、東京生れの少女が男に連れられて田舎行の半玉として輸出せらるゝかと思ふのが居つた。汽車は驛又驛を過ぎ去るも道道には拘すべし風光を見ない、午後一時廿分片岡驛に着いた。本經寺住職及信徒諸氏の出迎をうけ、實前に法珠を捧げたる後、思想の訓練と教の撰譯すべき所以を説き、偉人の人格を説き通して發現し來れる教化的格首に因りて修養に努むべしと説き示した。此の寺は約八十戸の停車場の地に七八戸の檀信徒あるに過ぎざる微々たるものであるが、何れも護法求道の念厚く、二十餘名の聽衆は尤も眞面目に聞いて居つた。講演が終ると發車の時間が迫つたので、暇を告げて午後六時實經寺に到る。同地信徒に迎へられて鹿島旅館に晚餐をしたため、八時參詣者と共に大法の妙珠を捧げて佛陀の冥助を請ひ、女性の參詣が多かつたので「物に隨つて物を隨へる也」の教訓を引證して家庭に於ける婦人の働きを賞し人の見へざる仕事に従ふも價直は其中にある旨を平易に懇説し十時半閉會を告げた。實經寺運性院は各年移轉と共に假堂を建設し、目下本堂新築の計畫中で其の認許を得て建築費の募集中である。此地四百の戸数を有するも一ヶ寺もない、されば此地に宗教傳道の堂宇を建つことは多大の價値がある。將來必ず發展することと思ふので、斯の事業を完成せしめて教壇を擴張して見たい、志あらんものは浮業を扶けらるゝ事を望む。

「十五日」二里の道程を腕車に乗じ上柏崎妙顯寺に着いた。修法後、予

は日蓮上人の意氣精神の卓越して居る點は現代人の模範として學ぶべき所以を講説すること三時間餘に及び、聽衆の心靈に何等か一道の業火を放つものがあつた事を認めた。同日午後八時龜梨妙顯寺に講壇を設け、世界的教壇を論じて統一の理想を明かにし、各宗の教義に對して扶內的に野論を加へたので他宗信徒の喧擾する處があつたけれども、予の信仰の勵まらざる左氏の優遇をうけたことを感謝する。

「十六日」午後三時上柏崎鈴木臺八氏宅に家庭講話を聞いた。聖訓の一人に笑はれさせ給ふなよ一の意義を平易に懇説して各自の業務に精勵すべしと誓しめ、講演後、同家の厚き供養をうけて妙顯寺の一室に夢を結んだ。

「十七日」五里餘の山道を腕車に携はれつゝ茂木町本阿寺に到る。同地は保守的で積極の風が見えない、寺は町の中央に陣取りて居るが、基礎甚だ小さく檀信徒の數も少ない、而して田舎寺院としては稍や体面を維持して居ると云ふのであろう。午後三時講演を開き、家庭教育上に於ける教の尊重すべき意義を述べ、二時間の講話を以て信仰を啓發するに努めた。次いで八時再び講壇に立ち、發憤忘食の修養より説き起して日蓮主義の奮闘獨立を論じ、現代人の惰性に痛摺を加へて覺醒を促がし、午後十時半閉會を告げた。

「十八日」七里の道を腕車に携はれつゝ宇都宮市に着いたのは午後一時、同市法華寺及各宗の信仰狀勢、且つは物心二面の文明程度を概観して午後四時半上りの列車に乗じ、統十閣本尊の前に來告の唱題を捧げたのは午後九時であつた。

「廿八日」予は萩原啓門師と共に七里法華復活の聖業に盡さばやと、千葉縣長在郡長尾實泉寺に講演會を開き、予は千葉縣人たる地位に於て特に日蓮上人の人格を心得べしと懇説し、萩原師は感恩の念なきものは人たるの資格なしと佛敎の四恩を説き、湧せる人心に宗教の靈水を濯いだ。同日午後七時半本納町草野乾煉場に開演、予は自己の業務に努力せざるものは人自身の存在を損無するものなれば自強不息の精神を養ふべきを論明し、萩原師は三寶論を提げて精神生活の價値を説き、多くの感化があつたことを見うけた。

「廿九日」長生郡古所安住寺に開講、萩原師は社會上に於ける個人の立場を明かにして修養の要を説き、予は現代人の修養的範疇的人格は日蓮上人なりと斷論して人心の嚮向を示し、一道の光明を興へた。此の九十九里海岸には久しし講演を開きしことなかりければ、一場の講演にいたく感動し、將來かゝる集會によりて精神を訓練せんかと覺るものもあつた。

「三十日」長生郡山崎妙行寺に開演、區内多數の僧侶及惣代に迎はれて法珠を捧げたる後、予は民族精神の表現者は日蓮上人の全活動に存する事實と意義を示し、萩原師は四恩の要義を述べて人生の光明を興へ、予等が一片懇むるが如き懇誠を披瀝した。何等かの印象を興ふことが出来たとおもふも、同日午後七時押田寺に開講、予は千葉縣民として日蓮を知らざるものは自己の幸樂を輕視するものなりと論じ、萩原師は同僧と社會との關係に就て上人の奮闘の偉大なる變化を説き、人心の奥底に靈光を發射するものがあつた。當夜一村を擧げて參聽し教壇の態度を以て聽いて居つたことは何となく悦びに堪えない。

「五月一日」國府岡如意輪寺に開講、此日天候驟れざりしも求法の士女多かりけるゆゑ、予等は一段と勇氣と歡悅に充ちて壇上に立つた。予は青年時代における上人の勉勵精力主義を傳へて子衆教養の模範となし、萩原師は衆生恩の意義を説いて同情仁慈の念を固ふすべきを諭し、信仰生活の無限の趣味を教へて午後四時半會を開きた。同日午後八時長柄村廣福寺に開いた。予は現實に囚はれて理想を輕視し、理想に偏して現實を重視するが如き眞諦を得ざる旨を説いて日蓮主義の圓滿なる教養を傳へ、萩原師は世界的一員として自己を内省し修養すべしと懇説して日蓮主義を明かにした。何がさて熱心に説いたので宗教の根本意義の一面だけは理解するに至つたことを告げる。

「二日」長南中學校講堂に精神講話を開き、予は學術研究の目的は健全なる思想を養ふにありと前提し、現在及將來の國民は國體的自覺に立つて世界的仁愛の心地に住し、精進の努力を以て自己の運命を開拓し其地位を作るべしと懇説し、萩原師は宗教は死後の生活を懸むる消極的意義でなく、活ける人生を訓化するものなりと論明し來りて人生達觀の妙法を教示し、予等が現代用語のみを以て上人の人格と教養を説き去り説き來りたのには、習慣信仰に囚はれない學生の頭腦には一段の注意を惹

き、偉人格の靈光に浴して法悦の表白を爲すものもあつた。何はさて學校の講壇に於て宗教家が遠慮なく其信徒を述ぶるに至つたのは、千葉縣として著明の進歩であると共に、所か精神問題に最大の用意を以て教養せらるゝ學生は甚だ幸である。是れ即ち上人威堂の啓示なりと感謝して益々人格の鍛錬に努めねばならぬ、講演後、楳屋にて飯塚師の業應をうけ、身を人車鐵道に托して茂原町停車場に着いたので、予は編輯の用務があるので萩原師と相別れて歸來の途に就いた。

「四日」午後八時千葉町本阿寺に開演、秋葉日度師は日蓮上人の人格に就いて各方面より之を説き、予は教の尊重すべき所以を示し、萩原師は信仰生活の内容を説いて固き信念を養ふべしと懇説し、聽衆は終始熱心以て聽いて居つたのみでなく、講師に對する儀禮いたるに敬格に教壇の態度があつた。若天格まらずして縱横の講説を振ふものあらば、必ず宗教的生活に入らしむる事が出来る。

轉教日數十一日間、講演十六回、予等一片の熱誠、人々肺腑に透徹して宗教の生命に近づかしむるを得ば、わが天分を果せるものと謂ふを得べきか、今將に此記を終らんとするに際し、

いよいよ道心堅固にして今度佛になり給へ。



活動史



東京

物質の文明は驚くべき長足の進み方である、而し精神文明は一步遅れつゝあるの観がある、人は物欲に走りて自己立脚の根底を忘るゝのが多い、活動寫真に十五錢の木戸鏡を拂つて半日を費すのを何とも思はないが、無料て思想を訓練すべき講演には足を向けない、今の文明は是でも健全であると言ひ得られるてあるうか、片輪な文明は病弊が多くて困る、どうしても大折伏を加へて而強毒之の化縁を布かねば、翻然夢の醒むる機会がないてあろう、されば吾徒は互に力を協せて折伏的運動に努め勵みて、此の國と人とを救はねばならぬ

▲四月六日日曜講演、身も心も花に浮かれて太平を謳ふ頃ほひなれ

ば聴衆いかにも氣遣ひしが、さすがは廣い都の天地、健實なる信仰を得ばやと集るもの多かつた、鈴木日雄師は現實生活の果敢なきに憧れて、永久の生命をにぎらざる者は人たるの價直なしとして信仰的不滅の意義を教へ、三上師は民族思想の發展は日蓮主義に因るべしと前提して、上人思想の表現は其好標本なりと結び、聴衆は満足と向上との念に充ちて合掌し禮を作して去りた

▲十三日日曜講演、熊井本光師は信行の要旨を説いて法悦の境涯を語り、笹川權僧正は佛敎の二大要領に就て詳細なる懇説を垂れられ甚大の感化を與へた

▲二十日日曜講演、國体に對する上人の透明なる識見に就て、三上師の熱烈の論辯があつた、山根師は運命と信仰との調節に關する日蓮主義を鼓吹して、各自の強盛の信仰を喚び起すものがあつた

▲二十七日日曜講演、京藤義應師は上人の各方面の事蹟は吾人の修

養の資料なりと説き、三上師は信仰と實生活の關係交渉を語り、井村師は法佛不二の關係及客體の統一を示して純乎たる信仰を奨むるものがあつた

▲四月八日小石川本念寺例會講演を開き、富田師開會を宣して信仰の尊ときを述べ、三上師は各人の生存に意義ある宗教を撰擇すべしと懇示して日蓮主義を教ゆ、此會はいつも熱心なる聴衆のみで、げに氣持がよい、將來益々盛にした

▲四月中淺草知見會親善會四恩敎林の講演、赤阪常玄寺其他における宜敎の事業は中々盛會で、笹川山根三上師など之が任に當りて、隨力弘通の責を果たして居る

▲樹治會——帝大一高の學生が日蓮主義信仰の爲に組織した會で、既に三周年を迎へたので、其記念大會講演を統一閣に開いた、賓前に儼肅なる式を行ひ、樓上にて小林文學士の現代生活と吾人とを調和せしむるには日蓮主義の信仰に

因るべしと論じ、晚餐會を開いて學生らしき馳走に舌鼓みを打ち柴田三上山田諸師の所感などありて意氣大に昂り、互に談話を交はして散會したのは午後十時であつた

▲品川——四月六日日品川町妙蓮寺に於て養徳兒童會主催の本佛降誕會あり、この日參聽者約五百名曉曉たる洋樂に壯烈なる君か代の合唱あり淺尾氏開會を宣し田中嶺子嬢の慶讚文菊田宣暢君の「釋尊一代の行化」山根日東師の「赤裸王」の訓話あり、終りて田邊南湖の義勇談に參會者一同へは例によりて歴史書學校用具花かんざし等種々の配與を存し午後五時隨喜鑽仰裡に散會したり

四月十一日午後七時より大森町山谷大原亮氏の宅に講演會を開催す同地方は池上中心の勢力圏内なるも何れも日蓮主義の軌道を逸したる雜亂法華の信者にして大原氏の如きは真に雞群の一鶴純日蓮主義の信仰家にして這回同信の敎友を得ん爲に特に斯の會を開く、大原

氏統一の大本尊に誓願文を捧げ淺尾清藏君「吾人の三寶觀」笹川日堂師「本尊と信仰」てふ題下に日蓮上人の純敎義と純信行の肝要なる點を解説せられ、參聽者に甚大なる印象を與へられたり、本會は月次堂回開催する豫定なり、願ふに正法傳道の所には三障四魔紛然として起らむ切に自愛奮闘せられむことを望む

常陸

常陸鹿島半島の若松村は成る一大村なるが悲哉交通不便の爲め從來兎角に敎化普ねからず、僅かに太田新田に本宗長照寺の一宇を有するのみ、夫すら永年法鼓の音の聞かざる状態にて、半島數村に互りて僅々眞言天台の二三寺院あるのみ、殆んど無宗敎の觀あり、加るに右長照寺の寺檀同比年兎角に和合を欠くの惡現象を呈せしものから打捨て難き場合に立至り、本年二月監督布敎師今成日誓一敎區管事山根日東の兩師特派布敎をなし、兼ねて寺檀の和合に熱

心盡碎の結果越へて三月寺檀一結管長現下を屈請するの好況を呈し更に其親敎に感激して有志一百二十余名の團體よりなる道交會の發會を告ぐるに至り、今や祖書の研究及び雜誌「統一」「日蓮」「天晴地明」の巡覽文庫を開く杯、復活の曙光ほの見へて前途有望の敎田と化したたり、則ち四月廿七日道交會發會式の當日は東京より山根日東師特派敎徒を張りて非常の盛況を呈したり、尙ほ斯會は今後實着に發展擴張を企圖して須田柳川の兩新田にも敎會所を開設し、進て新寺建立の意氣鬱勃たるものあり、何はしかれ東は太平洋に瀝み、西は坂東太郎を控へたる廣漠たる一大村にして漁利農桑潤澤に居民敎朴の氣風得難き良敎田と謂つべく願くは魔障なく斯會の發展を祈る

(同慶生)

千葉

東上總の敎田荒蕪せるの觀あるも之が開拓の任にあるもの勤めて倦まずんば花實相伴ふの成績を見るべきか「三月二

十日「午後五時上總東金町妙福寺に於て講演會を開き聽衆其説に服して功果盛ん也き生死觀と罪惡觀成島泰行現代思潮と日蓮主義森川寛行信仰論錦織日航師熱誠の講演有りしと云ふ」三月二十一日「山武郡豊成村妙善寺に日蓮主義演説會を開く山主廣告等の手配詭く行届き聽衆多くして盛況なりき」開會の辭佐野日惺「人心荒廢と救治策森川寛行」人生の根本目的成島泰行師講演あり「四月六日」山武郡豊成村妙本寺に在郷軍人主催盡忠報國の英靈追悼會を執行し郷重嚴肅なる法會を修了して、講演を開き「色讀法華成島泰行」「平和と戰爭森川寛行」諸師は長廣舌を振ひ「四月七日」山武郡豊海村西野善立寺に講演會を開く山主廣告設備奔走する所ありしたため老若男女堂に溢るるの盛況を呈し「開會の辭鈴木日王」「我深敬汝等鈴木正二」「佛教と經濟思想長美明」「日蓮主義とは何ぞ成島泰行」「人の運命森川寛行」の諸師形聲の二益を布きたり

と云ふ「四月十三日」山武郡南郷村五木田本成寺に講演を開き「開會の辭太田玄儒」「人生の意義成島泰行」「現代の思潮に就て森川寛行」諸師の懇切なる教示ありて人心の迷夢を醒まし信仰を喚起するものありたりと云ふ
 ▲宗教家は世出二面に亘りて盡力すべきは固よりなるも人の模範として表彰せらるるものは甚だ少ないのであるが、千葉郡邊田妙本寺住持澤純貞師は、多年地方改良事業に従事して民風を作興する者があつたので、千葉郡長より模範功績者として金若干を送られ表彰せられたりと云ふ
 ▲上總東金町本漸寺に於ては今回東京株式仲買商今井文治郎氏より五百餘圓の佛具一切の寄附を受け莊嚴一段の美觀を呈するに至りたりと云ふ、今井氏の善根限りなく功德無量なるべけれ
 ▲本宗青年布教家秋山乾英三橋會要池澤快整渡邊乾航河野見中諸師は四月廿八日開宗記念を機として

房州一圓道路布教を行ひ各地に於て法鼓を鳴らせりと云ふ
 春漸く老いて新緑の風情
 さらには深く人心新たる折
 法雨治ぬく降りそゝいて信法護國
 の道念を喚び起すもの多かつた
 四月十八日より三日間妙圓寺に於て本多大僧正導師として僧員二十有餘名を率ひ莊嚴なる 明治天皇尊儀奉悼法要を謹修せられた來賓には第十五師團長騎兵第四旅團長はじめ各聯隊長其他在郷將校又渥美郡長市參事會員市會議員各學校長の參拜者あり各々尊儀靈前に焼香し又參拜者中には十里の道を遠しとせず來會したるものもありて定刻前既に立錫の餘地だに無く廻廊人を以て埋ると云ふ盛會であつた
 「祠堂法要」元來法要に不熱心なる當地は昨年來國友師の布教に努力せられてより漸く効果現はれ、且つ檀徒總代及世話人の寢食を捨て東奔西走遂に未曾有の祠堂法要大施餓鬼を營むことを得るに至り卒

塔婆申込者は一週以前より其の數當日まで千數百本を算し之れを本堂に並列せし處實に偉觀と云ふべきか莊重を極めたり

「日蓮主義大演説會」十八日午後六時より開いた朝倉一乘師は開會を宣し吉田堅晴師の信仰より來たる日蓮主義木村義明師の自覺野口僧正の佛心論本多大僧正の信仰の道各演題の下に大獅子吼せられたのである時しも白雨の蕭々として堂宇に滿てる人々の心の内も洗はれたれば忽ち一天晴れて月は皎々と新らしく清き聽聞の土を照らすのである此れ實に我が聖祖の威烈が數百歳の今に於て淨合に叫ぶ聲と共に天地感動して此の靈妙なる現象があるのてあらう十九日は午後一時半より開會され前日に倍する聽衆であつた就中陸軍各隊將校の一團及び他派寺院の代表僧員の參聽せるは一際目立ち且つ日蓮主義者の印象を深く與へたのである吉田堅晴師の開會の辭金光孝碩師に次いで本多大僧正の忠君愛國の演

題の下に先帝陛下の御製より説き起しいかに大御心の高く深くあらせられしに及び世界の誇るべき萬世一系の御國體を擁護するに妙法の力によるべからざるとなし日蓮上人の愛國觀念の深くして他宗祖に卓越せるを演べられ聽衆の心念激動して感謝するもの多かつた
 「天晴會大講演會」廿日午後一時當 地東雲座に於て大會を開催された此日は朝來兎角天候定かならずして風さへ加はり開會前非常の降雨にて折角の大講演會もいと案じられしが意外の入場者ありて來賓は引續き詰掛けられしかばさしも廣き會場も忽ち人を以て埋められたり滿井文學士の開會の辭に井村日威師の統一主義野口日主師の天晴地明小林文學士は日蓮主義の發現の演題の下に懸河滔滔として數千言に及び社會の浮薄を見て何の爲めに人間は生きて居るか何を考へて居るのであるかと巧に喝破し而して確かなる信仰のない人間が社會の要路に立つと云ふのが間違つ

て居るのであつて其が爲めに益々社會をして誤らしめるのである兎角今日は曖昧なる事が多いのである雨降り候天氣に御座なく候と云ふような態度では何事も駄目だ同じ道を歩くのでも間い路より明るい路の方が好いてはないかと警句百出縱橫無盡に雄辯を振はれた本多大僧正は三教の精華と日蓮上人と題し神道佛敎儒敎の精神を説き日蓮上人は其の三教の精華を具足せられ唯一の教義を弘め千古不拔の宗教である事を證明せられたるのである六時卅分軒燈火を點せんとする頃閉會を告げたり
 「軍隊の精神講演會」當地野戰砲兵第廿一聯隊に於ては本多大僧正の豊橋巡錫を機として軍隊の最大精神たる忠君愛國の講演を催すべく鈴木聯隊長より交渉ありしかば廿一日午後三時國友師妙圓寺壇徒總代を隨て赴かれいと有益なる講演ありたり此日は特に同聯隊の一兵卒に至るまで全員聽講せしめ近來になき軍隊布教の盛會なる事を得

たのである

「東海道」布教擔任の山本吉田雨布教師は三月十八日より同月二十五日に亘り野田法華寺田原當行寺豊橋妙圓寺二川妙泉寺白須賀妙泰寺太田妙安寺新所妙經寺の各寺院を視察布教せしに何れも好成绩にして法益多大なりしと云ふ

「野田日蓮主義演習會」西山日諭師の發起にて四月十二日發會の式を擧げ夜間講演を催す西山師は開會の辭前田師は生ける信仰と題し現日蓮主義の興隆より色讚法華の要義を述べて信仰の統一を叫び吉田布教師日蓮上人の淨土觀と題し家庭も國家も社會も法華の信仰により苦樂を超越して歡喜に満てるの時現實娑婆の人世に於て理想淨土の風光をしのび得べしと説き午後十時閉會せり
同じく野田婦人修養會は四月十五日發會の式を擧げ西山師は開會の辭前田師は女徳と題し貞操と信仰の關係を述べ勤勉和樂等の項目を擧げて女子の向上發展を促し吉田

布教師は婦女子と信仰と題し我國女子の性質と信仰の價值を説き信後の妙味云ふべからずと結び萬歳聲裡の間に散會せしは午後六時なりき

京都

「四月一日」二條妙滿寺に國禱會を行ひ金光孝碩師の行學二門に就て懇説する所あり聽衆は日蓮主義の修養と信仰との意義を諒して一念隨喜に充ちたりと云ふ「大法會」四月十一日より三日間妙滿寺に於ては祠堂施主財團翼贊員の祖先靈及び戰役殉死者の追吊大法會を擧行せり大僧正本多日生師全國各寺院代表及び有志登山の僧員四十餘名地方より參拜せる信徒は各院席講堂庫裡中水館及市内各旅館に分宿せしが何れも熱烈なる信仰を表白して大衆一同法悅に充てり十二日明治天皇御奉悼法要を謹修す本多大僧正導師として四十餘名の僧員と稚兒音樂の莊嚴の儀式を設け敬虔莊重醍醐の法味を供ふ晝間説教會を催ふし原田日勇野老乾爲野口日主師の指教

と本多大僧正の微妙の法説ありて參聽者の心田爲めに大に潤ふ大講演會は毎日午後七時より妙滿寺講堂に開く

「十一日」野老乾爲師我國刻下の問題と日蓮主義の關係を述べて開會を宜し梶木日種師は主義の使命と題して日蓮主義の使命を説き法國冥合は我徒の取るべき最大使命なる所以を述べ能仁事一師は現代人の要求する宗教に就て現代を啓發すべき完全なる宗教は日蓮主義なりと結び本多大僧正は日蓮聖人の主張と題し之を古今中外に施して悖らざる大宗教にして我國の使命も各人個性の要求も皆是の主張に依つて光あるものなりと論談し多大の感化を與へたり

「十二日」紀野俊耀師は仲恭天皇と日蓮聖人と題して惡逆の北條と忠臣日蓮との關係を説き永く歴代の列を洩れさせ給し仲恭天皇に對し奉りて日蓮聖人は既に歴帝に數え給ひし不思議を述べて聖人の大忠を讃歎し三上義敬師は思想潮流と

(以上出席者)

中田日達横溝日葉鈴木日雄中村乾信市川榮吉福原豊次郎林誠一鈴木金藏市橋馬藏大多和來助橋本善助京藤長右衛門市橋龜藏見目清(以上委任狀提出者)

丹波

丹波國綾部町了圓寺は檀鐘並に鐘樓を寄附せらる依て四月八九日の兩日盛大なる梵鐘供養の儀式を擧げたり

八日檀家及信徒の少年少女壹百名は揃の衣裳玉棒花傘にて大八車に灯燈幔幕を以て飾られた大梵鐘を牽き參觀人は沿道に堵を爲して壯觀を極む本多大僧正は野口日主能仁事一井村日成其他の隨行員と共に綾部驛に着し甲綾館に入る午後二時本多大僧正導師の下に梵鐘供養並に撞鐘の式典を行ふ夜間日蓮主義講演會を催し住職木村義明師「開會之辭」を述べ能仁事一師は「現代と宗教」野口僧正は「覺」と題し梵鐘の由來並に功德を歎じ最

京都佛教と題し現代の思想界に理想派現實派の二大潮流ありて各々極端に奔りて毒流の深きを慨し併て京都佛教の現状は皆其弊に陥れるを極論して大聖日蓮の公正なる思想を絶叫し本多大僧正は日什正師の相承と題し日蓮聖人に依て傳れる佛教の眞髓は聖人の没後獨日什正師に相承せらるゝのみにして我徒の使命は然かく重大なる事を説かれたり雨烈しく來聽者貳百五十名也

「十三日」吉永義彦師は現代の宗教觀と題し現代我國の宗教に對して其缺點を指摘し日蓮主義の特長を説く關田養叔師は日蓮主義の大悟に就て詳細明確なる説明を爲し野口日主師は如説修行抄を拜讀して人生生活の上に法悦の大切なる事を懇説せり聽衆三百餘名なりさかくて大法會は終りぬ同夜十時大懇親會を開き互に所感を語り合ふて道念を養ふものありたりと云ふ
「天晴會」文學士小林一郎君を聘して四月廿九日午後七時妙滿寺講堂

に例會講演會を開く野老乾爲師は開會を宜し小林氏は日本國民の信仰と題して我國の現代思想は生活問題の爲めに輕薄猜疑陰險に流れ一歩々々危険の淵に沈みつゝあるを慨し國民の反省は健全の信仰に依るべきを論じ日蓮聖人の主義人格を説き二百の參聽者に多大の感動を與へたり
「十四日」教學財團第七回評議員通常會は午前十時開會市橋理事長事故缺席の爲め中村理事之れに代り先づ抽籤を以て會員の席次を定め夫れより議長を選定し十番西村吉右衛門氏當選茲に議會成立し本支部兩員より諸般事務の報告を爲し次て第一號議案より順次決議し正午閉會せり
一番井村日成二番野老乾爲三番郡山庄兵衛四番中村祐七五番山本熊之助六番平山由次郎七番瀧野喜八郎八番入江善平九番西村治兵衛十番西村吉右衛門十一番宇垣卯三郎十二番能仁事一十三番山岡會俊十四番野口日主十五番須山茂三郎

後に本多大僧正「大なる哉日蓮主義」てふ題下にて平易に且つ懇切に慈教を賜はり約三百の聽衆法雨に潤へり

九日午前十時先住吉田日禰大徳七回法要を勤め午後一時梵鐘施主大槻久次郎祖先の法要並に特別寄附者の施餓鬼法要を修し終て大槻久次郎へ御本尊並に賞狀當地頭本婦人會へ御本尊授與式を執行せり夜間大講演を開き高木本順師「國家的宗教」に就て井村日成師は「南無法蓮華經」と云ふ題にて統一論を述べ能仁事一師は「信仰と修養」に就て本宗の圓滿なる信仰論と獨特なる修養論を述べ本多大僧正「大なる哉日蓮主義の續講を演ぜられたり此日聽衆約三百多大の法益を得て皆隨喜讚歎せざるはなかりき因に鐘銘を擧ぐれば

夫鐘爲德音耳忽發迷夢頻醒會開古聖王欲鑄蒼生先鑄金矣詳萌警覺發菩提心眞俗所願悉成圓滿也
銘曰
六塵爲經披迷群就中闊淨尊音聞

主回向の上一同燒香かくて法會を嚴修し終て更に午後二時より日蓮主義講演大會を催ぼす梶木住職先づ開會を宣し關田養叔師は「法華經の信仰に就て」井村日成師は「南無妙法蓮華經」の題下に各日蓮主義を説き夫より本多大僧正は「本感應妙」に就て道德宗教の眞生命を訓誨せらる滿堂の聽衆所謂儒夫も志を立つべく一同奮起感悅せり六時半閉會夫より新座敷に於て講師の慰勞宴を張り全寺重立檀信も陪席して感話法悦に滿ち十時前終了全時檀信徒は昨年西部講習會に於て信仰試験に登第し爾來益々篤行に進みつゝあるは悦ぶべき現象にこそ

「地明會」四月廿日午前九時妙立寺本堂に於て開會

野口僧正は「以何」の題下に熱心以つて釋尊の大慈大悲を説き各々益々渴仰の心を起しね本多大僧正の「統一あり活力ある信仰」と題して婦人は愛情慈悲心を涵養してそれより更に慈悲の大勇氣を出すべし

一撞立正安國誓乾坤打破降魔軍
大正二年一月
總本山妙滿寺貫主 日生撰

大阪 四月十五日午後三時より東區高津中寺町蓮成寺に於て開會先づ池田幹事開會を宣し夫より左の講演あり「天晴地明の主義及び人格野口日主師」「日蓮主義の新發見本多日生師」「野口講師は人生道德の地明主義より説きて天晴主義の信仰生活に及ぼし最後に日蓮上人の主義行動を説明して各人の實踐躬行を促がす所あり本多講師は自家の研究より得たる日蓮主義の新發見として從來日蓮上人の法華經の行者として佛教眞髓の体現者たることは世已に之を知るも上人は尙ほ實に皇道及び儒教の眞髓を体得し實現せられ殊に皇道の眞意義は上人の解釋に依りて始めて完全に會得せらるゝ旨を説き即ち吾建國の精神包容の靈教敬神の本義に就いて一々日蓮主義に對照詳述せらる感激の餘り來聽者中直ちに

と懇切なる解説ありて利益多かりき終りて晝餐會を開き各自の所感談話ありて感興深く趣味初が如かりき「天晴會」廿四日午後六時偕行社に於て開會議事晚餐終り講演會に移る野口僧正の「天晴地明」本多大僧正の「儒教と日蓮上人」の講演あり熱烈なる演説と法を求めんと會する熱心なる會員とは日蓮上人の主義教義の如何に衆に勝れ秀てたるかを知り鑽仰の溟溟たるものありき

「説教會」廿五日天晴れ風涼し午後一時妙立寺に開く聽者定時刻迄に競ひ集る野口僧正は變化多き世に處して久遠の生命を知り釋尊に絶對の信仰を捧げ法華の大信力を出さん事を望み本多大僧正は婦人の清き趣味を有せざるべからざると共に法悦に住せん事を説かれ異口同音に唱へ奉る題目の聲高し

「國体擁護演説會」同日午後七時城南小學校に開講堤少佐の開會の辭會員安武歩兵大尉「奮闘の中心を何處に求むべきや」の題を掲げ冠

入會申込を爲せるあり午後五時過散會會衆約百名例會後直ちに福島紡績株式會社へ兩師の出張を請ひ同工場内に於て工女約七百名の爲めに精神講話會を開く「人の性質の両面に就て野口講師」「人としての心得方本多講師」午後八時前より九時半過て兩師交々平易に講話あり一同大に感動せりこの催は同會社長八代祐太郎君が本會幹事として夙に日蓮主義普及の志ありし故今回本多師等の來坂を機とし天晴會の副事業として遂に斯舉に出でたるものにて本會幹部にては今後斯かる方面に活動すべく計畫し居れり

「蓮成寺の立宗會並に講演會」前肥大阪西高津中寺町蓮成寺にては四月十六日特に本多大僧正を屈請して立宗會並に修堂法要等を營む即ち當日午前十時より本多大僧正大導師として井村關田兩權僧正田井日見師高木堂閣寺住職等列席先づ立宗會報恩の法要あり次で修堂法要に移り梶木蓮成寺住職修堂施

館日親上人の奮闘があくまで國体擁護忠君愛國なるに感じ日蓮主義の絶大無邊なるを鑽仰して止まらずと述べ野口僧正の「國民運動としての日蓮主義」にて日蓮上人の迫害に迫害を加へられても尙且つ國体擁護を叫び止むに止まれぬ大和魂と喝破し「神道と日蓮上人」の題にて本多大僧正は神道は日蓮上人によりて体現せられ神儒佛三教融合は上人により開顯せられたるなり能く上人の偉大なる人格は寫留那の辨によりて間然する所なく聽衆皆息を呑み恍たり惚たり功德甚大なりし來聽者百餘名十一時閉會を告げた

長州 我教團所屬の寺院は其數二三に過ぎないが萩町に

あける朝倉俊達師が熱心能く傳道の大業に精勵し人心を訓練するものがある、四月一日午後八時、阿武郡明木村青年會に於て地方改良と宗教訓練と題し地方の改善は宗教の信仰によりて完備すべしと教へ六日午後九時萩町熊谷町青年會

主催の下に修養の真意義を説き
 十二日午後二時荻町妙蓮寺講堂に
 て加州問題と日蓮主義の題下に日
 蓮主義者の迫害に耐ゆる意氣思想
 を評論して現代人の覺醒を促がし
 二十二日晝夜二回に亘りて妙蓮寺
 講堂に説教會を開き山岡僧正は我
 教の歴史及教權と題し經卷相承の
 真義より説き起して統一包容の思
 想を説き來りて信仰の妙光に浴せ
 しむるものがあつた
 二十七日二十八日大津郡了性院にて
 朝會師は宗教訓練と自覺に就て論
 し日蓮聖人開宗の理想を説いて多
 大の訓化を與へた
 二十九日午後八時阿武郡生雲村青
 年會に國民道德の基礎は宗教の靈
 力に依るべきを教へた
 三十日五月一日晝夜三回に亘りて
 同郡地福村青年會に於て日蓮主義
 と帝國の發展との關係及大正國民
 の道德的生活を論し教權と教權の
 調和を詳説して宗教と實際生活と
 の理義を明かにせられたので法益
 多大であつた

福井 四月一日福井地明會主催
 の下に本多大僧正野口僧
 正を聘し市内足羽小學校にて晝夜
 日蓮主義講演會を開催せり「開會
 の辭増田聖道師」「天晴地明の修養
 野口日主師」「國民道德本多日主
 師」「顯主義野口日主師」「國民思
 想本多日主師」浴々懸河の大論辨
 は能く聽衆をして敬意と感謝を拂
 はしめ多大の感動を與へたりき此
 日聽衆晝間三百餘名夜間は増して
 五百餘名に達せり聽衆中には縣高
 等官數名農林學校長其他の學校教
 員等多數ありき四月二日午後二時
 市内順化教育會主催となり順化小
 學校内に精神講話會を開催す「開
 會の辭北川順化小學校長」「國士の
 本領野口日主師」「國民思想の系統
 本多日主師」講師の熱烈痛切なる
 大議論は教育家新聞記者等を首め
 三百の聽衆を驅つて酔はしめたり
 き由來福井の天地は積年の久しき
 念佛の黒雲に覆はれ宗教の光明を
 埋没しありしも時勢の暗潮は他門
 徒を驅つて徐るに傾聽せしむるの

氣運に向はしめたりき
 「地明會」四月十六日午後七時相生
 町妙經寺内に例會を開催し増田聖
 道師は會員一同と共に寶前に修法
 を爲し日蓮主義の信仰を鼓吹して
 午後九時閉會を告げしと云ふ
盛岡 妙道會は日を迫めて教光
 の輝きいと盛んに進つゝ
 あるは欣ばしきことにこそ 去る
 「三月二十五日」會員小野孝氏宗
 學研究の爲上京の際盛大なる送別
 會を兼ねて新人會なる家政女學校
 長板垣政徳氏商業學校長富田小一
 郎氏の演説があつた「四月二十七
 日」開宗會を法華寺内に開き「開
 會の辭笹川臨應」「日蓮上人の人格
 金子治助」「意義有る生存平澤齊次
 郎」「日蓮の叱咤村田儀七」「法華經
 の引力平澤米次郎」余は何故に日
 蓮聖人を信仰するか富田小一郎「
 「佛陀の自覺板垣政徳」「人生の苦
 樂につきて大學林生小野敬光」終
 りに渡邊日研師の挨拶ありて唱歌
 聲裡に閉會を告げたりと云ふ

原畫 京都 深草瑞光寺寶藏
 對鏡 元政上人肖像
 自讚

畫絹不變色寫真燒付(裏打あり)
 特等繪絹大幅 長三尺五寸 横一尺三寸七分
 上等繪絹小幅 長一尺七寸二分 横一尺一寸
 實費送料◎大、五圓 ◎小、三圓

右は元政上人遷化の前年即寛文七年の九月(二百四十
 六年前)四十五歳の時、高足慧明燈師の請を容れ、對
 鏡自讚の筆を染められし草山寶藏の原畫を複製したる
 ものにして、讀は收めて草山集三十之卷三丁表に在り、
 上人の肖像として**最正的確**なるもの天下之に超ゆるも
 像として、繁社時事に感ずる
 所ありて客年十月より上人の傳記を發表したる因由と
 又本年は繁社創立第十週年に相當するとを以て紀念の
 爲め右肖像一百二十幅を複製し、以て行學併修の大鑑
 に供へんとす、有志速かに之を坐右に掲げ、蓋し自他
 省願して宗風清節を持するに益あらんなり、欽て白す。

東京市本郷區駒込千駄木町

大正二年五月

活宗教社

振替口座東京二三五八三番

白毫

毎月一回 半年分郵税共金五十五錢
 八日發行 (振替東京二三八四六番)

正義を唱へ、慈善を主張し、宛然林樞の觀ある教界に
 立ち、震天動地の轟叫をなす本誌は、活ける力ある宗
 教を双肩にし、熱血進る惡魔破碎の實行を本體にして
 居る、世界最爲第一の宗教雜誌である
 内容の教頁は、讀者の血誠になる眞善優美の主張を滿
 載して居る、しかも半数の文藝欄には白毫獨特の和歌
 あり、俳句あり、美文あり、諸學説ありて氣韻頗る高
 く、實に麗藻彬々たるものである志あるものは太々の
 意見を投ずるがよい
 勤王家來れ、慰安を求めんとするもの來れ、土農工商
 老弱男女の別なく、滲漉沮喪せずして來り、而して本
 會の妙音を解して、眞實の奮闘家となり國家富強の提
 供者になつて欲しい、至囑

東京市淺草區松葉町四番地

事務所 一佛土研究會

月刊 活宗教 第一百十二號 每月十七日發行

寫真 六牙潮師自刻印譜(其六)
 社說 十年後の宗門 (續)
 史傳 深草元政上人 (其六)
 論壇 廿八宿論
 論壇 宗門教育の危機(一)(二)
 教海春秋 謹厚の舎監遠藤是妙君
 (1) 日宗管長の後任問題
 (2) 宗務總監の後任は誰?
 (3) 而諸罪衆生の我
 (4) 坊ちやんと嬢さんに
 (5) 北海道行
 雜錄 墓前黙酌の記
 (夏骨舊廬の夜の梅)

家庭 岡教選
 中谷臥牛
 穀 堂

▲本誌定價一部十錢 郵稅五厘 (前金、切手代用)
 ▲半ヶ年分 六錢 一ヶ年分 一圓廿錢
 ▲廣告料 一行廿錢 一段三圓 一頁五圓 (割引)
 東京本郷區駒込千駄木町

活宗教社 振替口座東京二三五八三番

虔告

前號に豫告したる出版物の儀製
 本相遅れ候爲申込者へ送本する
 に至らざりしも近日中間違なく
 發送可致此儀御諒承相願上候

統一團布教部

前机・幢幡
 大販賣



御來店の節は陳
 列場へ御來車被
 下度はれ迄とは
 一層勉強仕各宗
 の佛具一切陳列
 仕置候

正價 三法堂佛具發賣目錄

注意

佛具と唱すれども此の種類數品有之候を以て一々記載する能はず。依て特に佛具正價目錄を以て一々記載する能はず。御覽あれば。寺院様方の御入果品。一切の買物何程速方でも坐ながら買物安價にてき升。早く取よせ御覽あれ其の正價附の品は左の通り

佛具一切 過去帳の類 大般若經 一切經 理趣分 位牌 太極
 佛具金物 一切 釣鐘 木魚 磬 一切 珠數 大念珠 念珠
 子 中宮御湯 金銀 水引打 佛具 香 珠數 大念珠 念珠
 線香 佛具 佛具 佛具 佛具 佛具 佛具 佛具 佛具 佛具 佛具
 三寶 寶蓋 平鏡 木像 佛具 佛具 佛具 佛具 佛具 佛具
 板 佛具 佛具 佛具 佛具 佛具 佛具 佛具 佛具 佛具 佛具
 佛買物坐ながら自由自在

佛具卸部 京都市三條 本舖 三法堂藤田總次
 通小橋西入
 特電話二千七百八拾三番 振替貯 大阪 四二五九
 金香號 東京 二〇七一
 小賣部 同市三條 三法堂佛具陳列場
 通大橋西入

橘香集

本書は法華經の要文と日蓮上人の遺文中より警句教訓
 を抄録したるものにして内容に於て發心教相佛陀人身
 法界本尊行法得益警策の諸篇に分類して研究引文を要
 する場合は尤も至便也日蓮主義鐵錐仰者の供ふべき珍書
 也

本製皮金文字 八美本
 並製タロリス金文字 入
 (郵 稅 貳 錢)

毎月一回十五日發行、一部金六錢 郵稅五厘 一ヶ年前金七拾
 壹錢 代金ハ振替貯金口座東京一二一九番へ拂込マシ此場
 合ニハ誌料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候

大正二年五月十五日印刷發行

發行人 井村日成 編輯人 山根日東 印刷人 鈴木日雄

發行所 統一團

東京市淺草區北清島町十四番地

文學博士 三宅雄次郎君序
 大僧正 本多日生師著

(再版四月廿八日發行)

法華經講義

洋裝全二冊貳千頁
 正價金四圓
 特價金參圓
 內地郵税金貳拾錢
 臺灣韓八百匁迄の小包料

目次

- ◎序說 ●第一章緒言 ●第二章法華超勝の教義 ●第三章諸種の法華經觀 ●第四章天台の法華經觀
- ◎第一節 ●第一節三種教相の綱格 ●第二節十雙權實の巧釋 ●第三節六重本迹の大意 ●第四節三法の辨別
- ◎第二節 ●第二節待絕二妙の解釋 ●第三節一念三千の妙觀 ●第四節日蓮の法華緣起の妙旨 ●第五節究竟
- ◎第三節 ●第三節但令用實の解釋 ●第四節三尊の妙義 ●第五節佛界緣起の妙旨 ●第六節天台講經要義 ●第七節
- ◎第四節 ●第四節圓善の活釋 ●第五節十節台當教相の異目 ●第六節第十一節身讀法華の壯觀 ●第七節信念成佛の要道 ●第八節
- ◎第五節 ●第五節兩善一貫の活論 ●第六節十節台當教相の異目 ●第七節第十一節身讀法華の壯觀 ●第七節信念成佛の要道 ●第八節
- ◎第六節 ●第六節四教五時の統釋 ●第七節五重玄義の妙解 ●第一節日蓮上人の學風 ●第二節本化獨特の五玄 ●第八節文々四釋廣
- ◎第七節 ●第七節釋の概略 ●科段 ●來意 ●大意 ●釋題 ●文々解釋 ●通解 ●妙解 ●異解 ●批判 ●質議 ●解決 ●字義 ●
- ◎第八節 ●第八節譯の概略 ●科段 ●來意 ●大意 ●釋題 ●文々解釋 ●通解 ●妙解 ●異解 ●批判 ●質議 ●解決 ●字義 ●
- ◎第九節 ●第九節參考 ●讚唱

法華は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛教教觀の實歸にして、佛陀觀、宇宙觀、人身觀、教法觀、行法觀、その他教相教義の全般に亘りて之を調整し、發揮せるもの、苟も佛教の眞意を知らんと欲せば必ず法華經に來るべき也
 古今東西の法華經觀を網羅し、特に天台と日蓮との創見を發揮して更に新考案の下に佛教の積極的統一主義を闡明したる本書は實に佛教研究の上に現代及未來の光明たらん矣

發行所

東京淺草北清島町
 福善堂東京一三一九

統一

一

團

國民性と佛教

大僧正 本多日生

最善の信仰 辯護士 吉田 珍雄

日蓮主義の國家に對する態度 三上 義徹

海軍の話 海軍大佐 中村虎之助

統一

▲思想修養——▲日蓮上人傳試演
 ▲活動教信

生活問題と信仰問題
 古神道とは何ぞ

文學士 小林 一郎
 法學博士 寛 彦